和語陰騭録 全

ヤ二9
19

日仁9
門
號19
卷

明 袁了凡著

日本 譯詐

和語陰騭錄

全

此編ハ大明袁了凡と云人其子に教訓の為に書もの也。我朝にも古より男女両道と唱て善を勧め悪を懲す書多し。皆是陰騭録の意なり。

凡例

○此書和漢とも未だ釋ざる事を写そこ。

○頭書其ほか注釋の事。此書の要者ハ大明勝進士袁了凡と云人其子に教訓の為に書もの也。我朝にも古より男女両道と唱て善を勧め悪を懲す書多し。皆是陰騭録の意なり。

○此書和漢とも未だ釋ざる事を写そこ。お後の序文ハ。歴史綱鑑の評者うて。豊臣公朝鮮征の時より。贊畫軍務といふ官にて。漕そこうれどもそれハ紙墨の費も多しと云ふほどの大將まで。如此松ハ従て朝鮮へ渡りし人なり

○此和漢ともに幸文を擧て漕そこうれどもそれハ紙墨の費も多しと云ふほどの大將まで。又幸文を用ふるほどの人

ハ此和漢を備〳〵てもそむべきるれバ是
を畧もそるるり
○此書の一體達意を專として辭ぢくろまる者
故文体ハ無益くそる事へさへもそれで
二字三字一句二句ハ結びたる者故書きそう
よくそうるの多〳〵さうの如うてハ解〳〵やそたやう
ふとなし言外のこと味を推そろ。恩をとくへ
たるるも有り。然うと云て本文のみのるを添加
もつてるとハんべ〳〵ざ〳〵者るり又但通俗をもと
る有ふ字句及び事實ハ必〳〵を一〳〵み注釋せ
ざる者るり

○唐士ふ及第の業とハ。伊勢あの制度を通
とくる。寫本も諸書をひて詳也。書くへ解条ハ
るり。西洋耳をくこと云ぐ。唐士の風俗ハ今時の日本
とちがひ。此方ふて云ク村里ごとに。学校として学問所を設けて。士農工
商のそべるく。志そろ者を教へ学
べしめ。其中ふて学才そろる者を。村の学校より
選び出して郡の学校へ挙。郡より城下へ城下より
京へと次〳〵ふ選び出して。甚そう甚人の生れつき
の向そ〳〵ふ従て。百姓役人ふ仕そろるもり。
故ふ志そろ人ハ甚出世の為ふ学宮をとそるもこ。

号を及第の業として、今日まで至人ごとに、ぶら八士ふ作り旗かけるゆ故唐士のへ唯此事のこ掌ひらげむるゆ固て此の書の好絵皆及第のへのよのゆとらて教へ喩を者るゆ此ゆを舎意して。此書を見るゆ第一のへわなゆ

○文意の断絶せざる不も。韋歳を短くとるへ読者の退屈を恐て抜ゆ

陰騭の二字ハ書経ふ出て後とゆ福とふことゝして名つけたる者ゆ

立命之学

立命の学ハ天命を知て死生有命富貴在天と綾命の者ことを而ゆを綾命の者も長命にゆり貧賤の者も富貴ゆ子ゆるゆゝもの子有ゆ難方を暮しゆる為ゆり其所以ト云ふ至て除くふ為ゆ故よ此篇を主命之学と題ゆる也

幻斗の時父ふ離る其後成長して及第の業を

学ばしゝゆゝ或時母の仰よ曰く。甚ゆ父死ゐして後。孔ゆ孤苦て世渡る業も知ゆぬゆる八甚ゆ及第の業八行来ゐも知れぬわざゆるまバ今ゆゆ警着ゝ為ゆ人を救ひ又流世の為ふ

甚方ゟ父も無て。そ母ゟ思召て。
人の命ゟれバ。歎むべきやうなんバそこら驚つ
を学びしりより
さて或時子慈雲ちとゟふちれ遊び居しゟしゟ
一人髯長ゟ老人出来まり。そ徳の人ゟへ
ゟれハ子も客を改め懇懃ゟりてゟりたゟぎ時ふ
此老人ゟれ向ひて曰。足下ハ及第出世ゟゟ人ふて吟
年ハ決して学校ふゟて進む人ゟり。何ゟと及第
の業を捨て驚者ふ成まゟ郵。吾ハ雲南ゟて孔子生
ゟ稱せしゟゟ者ゟて。郎廣節の易道の秘極を
ゟるゟのゟり。此易道者外ふ換くゟき者ゟり。但

来ゟ厭ゟ仰ふ爰ゟき数あゟる故ふ遠くゟと路ゟ
来まりゟき厭ゟそんゟゟて
爰ゟゟ迚をゟんゟて。案内せゟゟゟふ
ゟりけり。我等ゟ時何ゟも怪ゟれゟもゟひ
うぐる。先ゟ私宅ふゟり。母人ふ此由ゟ告ゟ
人の曰ゟれハ奇妙ゟるゟゟ者ゟり。何ゟも
庭の人ゟてハゟまゟけまハ浮気大切ふゟゟまひて。
其教を受てゟんゟべしゟゟ
つらひ態ふかくまひ居ゟり
さてそれゟり。試ふ色ゟの
ふ一つも遠ふゟゟ。當時の人ゟもん実のやうれ

八云ハさうそう。此ふうそう
教ふもうせて醫業を止くえのごとく及等の学文
をせうごとて此老人ニヲゴ一生の大概をたて曰く貴
殿某の年ニ八学校ニ入り。某の年ニ八撰人ニ挙ら
れ。縦令村の学校ニ授ニてハ。第十四番目郡の学校ニ
て八第七十二番目。城下の学校ニ授ニてハ第九番目ニ。
某の年ニ某の年まで。公儀の御扶持を含ける
る者ニ、九十二人ニ而ニ減ニ某の年ニ。
貢人ニ云ふ成ニ貢人ニ成ニ後某の年ニ。選挙
せられ〳〵而川ニ云ふ外の大尹ニ云官ニ成ニるまで此
役目を務ニて二年すみて又京ニ登ニる十三歳

八月十四日ニの時ニ病死ニるまで貴
殿ハ一生子ニ〳〵ニ一人ニ〳〵ニるまで
るの共悉ニ書ニ〳〵ニ而慎んで一生の覚悟ニ定
めニ〳〵ニるまでの事

此ニ〳〵ニ村学郷学国学等ニ於て選ら
そこ学校ハ云ふ外ニ〳〵ニ極て細ニの事ニ而も一ニ〳〵ニ
て老人の言ふ違ニ〳〵ニ事ニ〳〵ニ其中一ニ〳〵ニ
き平ニ扶持を頂戴ニ
ニ〳〵ニ而ニ〳〵ニ七十ニ〳〵ニ
ひニ〳〵ニ及ぶ時屠ニ
錄の人ニ〳〵ニ推ニ

此時予ども斗石のお遠と附て老人を疑ひ
なう為るともなく又揚ぞうを人有りを不吟味
るうとう人自歩して屠ぞを乱されて相やまふるり結
白髪老人のおひ宝ぬくまるれ
予此時狩くく老人を疑ひそり其後とうくして祝を
経る処よ又隠公くうそう予ぶ偽りうる文章を
見て大ふ驚き此を茗の名士も劣らぬ器量也
りやうの器量の人をもさ尓て御用よろくぬそ
不忠のそりうそりて揚その憤を解和りけ重く
役取よ〻えて、法の通りの時名よ貢人へうのまろ
此時接待方を計るよ恰と老人の言バよ違もたが

ハそ九十一石お斗とうそう予此まよ因り進も退
も疾きも遅きも盡く天命一定の道理有りてう。
るを悟り且つ老人の妙術よ嘆伏して弥一生乃
覚悟を究め毛頭私介の望こうを止りてぶるまま
らくくと成〻そり
それう悪都よ〻て留事一年也〻其同よ故有
て南雍よ云処へ移りう〻役所へ某せさる面ふ生へ
棲霞寺ふ往いく予ら舊交雲谷禅師よ伯へ従
来雑洞の情を述べそ世同出世の物語よ長ト三日
三夜寝食を忘まてそりう雲谷ふ小語らく気て我ら
法門乃悟りをねざるへ妄会よ障へられバるゆ事度

我と性誌こそる。三日三夜の同おーの宴会を起
こて風情をつんぞ。何ら之を見解皆て然こやとらく。
予ら曰我き孔先生とつくる仏教の教を受てせの
中冥貴冥賤貴賤天生死皆定うの教有ら之を
知ろう。然るよハ何の類ひ有ろ之を念を記
さざるやと若くう。其時雲谷大よ笑く曰我今
まで八貴賤を畜世こそ今千万人一時之ち越こる
豪傑のくらと思ひーれ今の迄者を笑てい
をー通うのれ人ろうこそ。暫くハ互ふ黙然ーう。
良ありて予ら曰ざやうに定てを理
ありざーありこいんが雲谷の曰く大

道理ありるう。幸ろう命数こ云者そ生の朝
ろうれの免べよもるまで。一定ーて生を生る者多う。
而まざも極若の人と。極悪の人こそ一所住の若悪
の強さよ引ろれこ天ろう定めこる命数の妄用
さろうくい遠よまう。但常底の凡人のこ命
数ふ縛られて一生をる者多う。貴厳二十年来彼
老人こ会共用ありをられ。一毛の相違も無きこ取了
ざらん凡人ろうこそう。予ら曰足ま八奇らーれ論
をる者ろう。而る間人間一生生れ受しる。天命
一定の数も通るれば通れしらく者こ候や。雲谷曰
ろうまも通ざらくるよ。我を空間をつろふ古今

もよ。名こそきく人ほとけ天樂よ迷へり。早く厭我說を
實なんと思うれば。我をとてそらを矛らられて實のかるべし。
聖人の作りおける書經よ曰作レ善天降之百祥一作不
善天降之百殃と叶意へく善を為せば天より百の祥
を與へ惡を作せば天より百の禍を降すとそ。天命
一定の者ゆゑに禍福も一定するぐし。仍て此のごく
一生の内よ。おく與へつ奪ひつ不定をやゝ又我が佛
教の中よ求功名得富貴得富貴求男
女得男女求長壽得長壽とそう。無まぶ初生乃
時より死る。甚後の不行よ固て中途よえ
の天命を変じて或ハ禍を與へ或ハ福を與へ

そう。左傳よも陳の慶氏が殺さるゝ處よ。書經を引
て天命ハ常無き者とそう。又下のそうみそう。儒家
の聖人法門の如来倶よ妄語を宥るぐうや
何とうぞゝうとそう
予ゞ曰。儒仏の聖僧を引て爭ふ最も今るゝ
多也。但し今おし疑ひ無きよ非ざる孟子の言バよ求
則得之求在我者也とそう。又曰て得ざる云りのハ
我ゝ身よ備りたる。仁義禮智の道德を求るなり。
故よ求在我者ニ云ハゞ非ぞやゝ内よ備ゝらざる事乃
功名富貴ぞなどの宣ハざる多也。雲谷曰儒仏の乃深

廣狹道品等の說向ハ各別ることでも。幽明感通乃道理ふるてハ全く不同ハ無き者ふれども。後儒ハ佛法を疾むん強き故ふ聖道の仏理ふ仰ぐことまでを破滅せんとて此まで偏ふ聖賢の語脉を曲解もするゆへ。貴殿もまた孟子の語を見錯ふり。今我一切の禍福ハんうおゐてふるゝと。例を引て孟子の語を解きこゝろべし。固らく色うの不仁て云ひ愚人の止むを得ざる者。釘を打く人を咒咀もするも一心の感通ふ依く。或ハ人の眼をおつぶし或ハ足をおやまし。或ハ命をこそ殺をなう。此をみくそれべ眼をおつことを全治もよ

足をおるやうと横推も。命と取殺と刀も外うう持ちまうるも非ざ。皆ん中う取出ふる物ふ非ざや。又若事ハ行て云ひ郭巨ガ釜。孟宗が竹のこ王祥ガ鯉魚ふ詩う雙鯉と得しるハ是皆孝ゆの心中うら出る者ふり。舜禹ハ本と天位をつくべきたゝよふて非ざ。匹夫の時うう仁徳を積で。四百餘州の主と成り四百餘州を取出ー血つ。是皆の例をとれて孟子の文意を見くべー。在我者ふ仁義道徳のこゝろハ非ざ。功名富貴ハ在我者ふ非ざや。ゐゝ次下の文ふ云ひ萬物皆備於我ー矣とつり。若ー我ー内ふ向て求めんとりて仏

不可不て論阿或ハ種々の謀計を運らして求るゆへ
求めやうの為方ハ衆篇もあるべくなれども天命の許
さゞれバたまるものゝ成就せぬものゆへ故に孟子乃
次下の文不求之有道得之有命是求無益於得
也未在外者也ハ意ハ功名富貴等ハ外よりくるやうなれども。内より求ると得るゆへ益あり外
より在る者とんだ外より勿て務を求るゆへ得ること益無
とのやう
さて又取りつゞきこゝもとを頌けて
云ふくべし。孔聖人の書八一字千金ともいふ者なり。
甚中ま易経ハ天地鬼神をわしやるやうにて仍り。

たまるゝ者ぞれへ。一言一句こゝもとく也。甚賞罰利害の
甚ゞ恐ろしき者ゆへ。甚易経ハ曰善不積不
足以成名惡不積不足以滅身小人以小善為
無益而不為也以小惡為無傷而不去故惡積
而不可掩罪大而不可解ハ意ハ人こゝ生ふ
おゐてのちのちまでも為るまじ。永仏も
ゆるされと。軽く為ること忠ふ奥の
類ゐまで着殺し。焼殺してをくらふまして蚤蚊ぞ
殺すにハをよばぬ。甚ゆるし。朋友
妻子着属の間ふ而ふして。事にふれて折ふてハ
きたふ。多く若きゆへ易の文

意をいふくさんとぞ。此ら皆のふ意をふれども一こゝ消へ失
せて。ほゝ狭ゝ狭ゝして大家と成て。一夕をも滅
亡もるとまりぬ。さて又若ふ指くも名そのふ人おゝ
ほくの若事ふ。何の祈禱もなふにもふくへ
どもなくそ行へふ後ゝて大いなる福徳をふる
そこ也。又同ふく男ふ曰積善の家ふ。有餘慶積
不善の家ふ。有餘殃とそう。此ら皆ふ亜ふ人の童ふも
能く知ゝる語也。次上の文意と全く同ふ也。
能んを付て考へこれ山崖ふ登るふ非ずやと
そゝう
雲谷又予ふ向ゝくへ。彼老人向きふ家の一生涯を。

占ひ極められるゝ一ゝ記くんそうほゝ一ゝ
されとゝのゝ一ゝ右老人の占是まで一點のおほ違ふ
く狂ひまた占ひ定そゝるゝ一家一ゝ
語うせゝうべ雲谷逐一家畢つく記ふ入
る易者とそれ而ゝふ
老人のつゝゝ如く登第も高ふ滿なそふもゝ
壽の余もふ十三幕ふ事ふ極て予が胸ゝ入ゝ如く
修治ふ周ゝく天余を変ぢるゝ記へまゞ會得ゝた
ほんざうや否や予芸ふ於ゝ長久ゝして對
て口伝示ゝの趣へ甚深至極ゝなどれども拙き
まゝてへまゝと意得ゝくれ何者んて高発ふ登ゝる

人をころす大底皆猫相あり掛老ゐ猫相をゑ
しく若ものを倒れしてゑ猫動も成がたし
そこに生れ質としてせの中の世活の忍びがたく
人の冰をふくみ色むるをやしくく我ら本智をもく
人をころし或ゐ我ら思ふの志をこと今殺も多く悠上
取行ひにても妄り罪つくりをもふれそ此その類
皆猫の相うとなくこうやうの器こそ行してゐる
寫よ登るるを浮べ夕んや具又畜無の理をもつて
推察をゑれ掛者み打くるとをおくるござるよ細數
くのう一まんそ北の臓なるれハ去こゆるうれみ多
く草木を生ど清ゑるうみこん魚なきを者うう掛ゑ

ゐれいどそれそしてひさく釋迦ゐくるの基もくこへ
るう是よるべきろれるべや二こへ妻なども溫和
ぎくるゐ此ゐこへ祇園を掛を書育をれ如く人も氣慶
ふ溫和るゐこへ多くの人ころ書育をれ者るれべ天性
とるもはんこおろきをるう掛ゑへ杖みなこの手ま
木を吹もき掛と附そのやうん怒氣も並くうこへ強く
溫和の氣象ゑき者るれべよかどのりて書ひそぶ
れ人ぐんこへ冰るべ一三こへ忍悪ハ天地のんうこおを
生るの幸るう毎ど慈悲ハ救生の根ぶーるう命うく
掛ゑんハ活なの如く平生の外打と氣分ーるれ高
ふーーて人の急難をくくもんぐんをくぶーく

此に走り彼に走りて媚て其急難を免かれんとするハ救ふ
ことをせずと此等天地自然の心に背く故に子を
おもはざる所の理なり凡て人ハ氣に依て立つ者
なり氣尽る時ハ死するなり仍て或ハ其に應ぜぬ
力わざ或ハ言べからざる者ハ生氣を損ずるなり拾
者ハ陰陽の如く平生多言者なれバ生氣も不足
ならん己が生氣をおさき者なれバ子など生ぜざる
ざれ生氣ハ減くなりべからざる所の理なり五に六
大酒して腎精をそこなひ六に毎夜にかさなる然し
て元氣精神を保養する事をせずて此の如き類
皆子なりがたかるべからざる理なり凡てなさざるなり撲の

過惡なく穏やかに暮らし足ことを知り高友の望
もなくをおさゝまり来へ曾て欲く覚束なさる
ことなく者に
雲谷器を含んで円なる所ごとく其れの厚相
持て八高業にも登らず子も無き事なく倶
此等のことハ世間百金の家代千金の家代或
ハ又十代續き又代三代續くこそ多くの生れ
德の家教なく天より曾て毫の指引も無
き者なり今なる上ハ足下の如く天命におち任せて
うらくは覚悟の有るなり而るに我に一の要
論あり薄んでに家く兄を世界の人の多く教化

もぐされら。己もくが非を知ることなくして。行ふも但
己れのこと足ることと思ふと思ふ故なり。足下此の物語ら。
一ぺん人の死ぬるまでくらく悪しき隠しをつくるやうすを
足下の毛頭も隠さるゝ所なく。我が非をくらまし此此
を全く足下の猫相を生ずべき業表也。太甲に
曰く天作孽猶可違自作孽不可逭と云ふ意
へ天命の定めて受ける禍は違ふへ務方あらうて逭ると
自然ふう作りたる孽ハ逭るゝ能ざることなり。此
表かれむ生ずる禍も。務方悪しければなり。
もし冥加よつきて猫をも受るなり。自然ふう務免
れる猫徳へ天神地祇の冥加に依らざる故

も奪ふる能わざる。彼老人が足下を生世と逐ぞ。
るもものとつゝしまざる天
バツ下の務方ふ依らざる。天神地祇の冥加に依らざる
ち変じて猫徳の相ふ転ずべきこと足下既ふ我が非
を知る人なり。偏屈私曲の人ふ非ざる故。甚だ多き人
みうぞうをいく悪をなして若ふバツの表
及ぼさるゝも。ん男きうの非をや。今ふうの浅雲猫
のんを励まして務て徳を積ふ。務て徳
りう怒りの気を押し除ん。天地万物のんこと
記し務て指弁を蒙べし。此等の悪をなして若
ふバツ志固く一決せざる薄福の貴殿へ

即時に乱さるゝ如くぱつと志一決してぐつと改めたる事を風と。今日始めて生れ変りたる如しと定まで思ひ切て天命を待ば。時ならずして滅する者也。道徳の身へ人同じからも。必ず能く天命に通徹する者ぞ。貴殿其再生の身をいよ〳〵徳性を推し廣めたる事を務め行ひ。多く陰徳の報を積まば。天の上帝より再生道徳の事を風へ受まで荷れの事風の天命を取て捨て新たに厚福の招を喚くなかるべきぞ。只ト筮の為のみならず。若よの凶を避て吉よ楽く為の聖模ぞ。若天命一定して不易の者ぞと云ば。もとより也。若も避べきやうもあらば。皆聖賢の格言ぞ。幸に風在ぢんやと云れしぞ。予此を望む事生涯の当の。初て服を実に日月を得たるが如く。骨髄に徹して忘ずとぞ。即時よ退て我が一毫を認め。先つ科第に登んと祈る。若事ごと佛おもふ如く没悔慚悔して足を措く。雲谷禅師欣然として曰く自今以後貴殿乃面前を出て。予に教へを毎日ぱ帳面よ記るべし。

ろう一心ぐらゐも無くつきあかせく
假べ若二つありて。無二つの名をつけバ二つの
てく一名とく付さるべし。二千條之滿ち内よき原ろ
不預ろ。決して成就さるべきさう。雲谷之子に教ら
まして同ろ元そ古くの聖者のぱくを教ろくんのりひを
卽の行ひと。二つの教方ありひを用ひ下根の者ハ生そ身の行ひを用ひく。
り無くとんの行ひの無くもひなうぱくまま
世の人ハ多く下根なれバ。無身の行を專とそまれる
たろう。而れども若百ハ才識ありくん人なるこバんの行ひの
該なる。一と通りた示とべし。孟子曰。夭壽不貳脩

身以俟之所以立命。此則愚僧が所謂立命の從
の出不也夭とん短命のろ。壽ハ長命のう也
長命を好こ短命を無心バ。同の第一よんづらし
をさるろう。今くを不貳んく。短命を無心バ。
天通よお但也て微塵も心づらひを也ど。浩然の
氣よ混一て心を虛空の如くれおろう兄そ一
念不動と云て一切の念ぢ
の時のんへ虛空と含く同ト
空ノ本ろう。さるろの
論もろ一。況や長命を好こ短命を無心べきさう

へ。於くに空きこそ。此の如くお臺のくれを。
虚空の如く無念無意にて捨てゝ置て一向後
み。徳を修ぐ耶ち自ら求多福のまる者也
くと讃へくこそ。一切の草木ハ種子より故ニ生
くそう。若し種子をと大地へ植へゞして虚空ニ
をうべ。陰陽妙くくぐも。此種子をを生ぜしむる。
へそくねそう。心を空よくとくくぐ
くそう。名くの天命を拋捨てゝ仕方そう
種子をを虚空よおいくく草木を生ぜしめず如く
そう。さて修身と云ふ家そ
て。舟の魚の破損を修理をして功徳の結末をゝて倫

理よる意そう。倫ハ常の如く。徳を修ぐれ
己をとそうごだ。又天命を畏へそう。
富貴を願くそう。其外一切の望そうを捨ける
う。そぐく何ぃ望む。さそ後ニ天乃次第
の意そうして居る叶へ。自然と一切の不須臾をれ
そう。是を俟之と云ふそう。元そくの須ひ者ニ
書命そう。重き者ニそ孟子ニ書命の
るをを考て。一切の須望立命の誤を。
者そう。又道ハ立命の誤ハ聖道の幸ほく知べきこと。
又道ハ御存を書くハ秘伝をを云ふ
ぞして書たる存ハ罪深よ知ることをれ

るのあり。甘く書きくろうんぺ筆を執て存を書く時
諸の雑念をお捨てく。一塵ちぢの念を起さざるその
時一張を書き終るや也。此時を混沌開基と名く。
式の一張くろうんぺと書きくろうて甘くろうよ念
慮起らざれば甘く霊験ありとそ。上の壽な
のぺ大壽不載ぺとえを文意と。ぺ道家の反念不動乃
そと味をふくぺんの行ひをふくぺ古人を會得せ
らるべしぺて身の紛ひくんの別のるとあるくんの
者と会を施しぺ衣を與くなどとる底の
るなろぺのるとを行よ者の悉んよりるべきや
うんをけんども心の紛ひくんを者と比ぶをバ未ぺんの

垢をしくんぺ全くんの仍の場所
よふぺるのあくんぺと此れを用くぺ甘く代りよるぺる
を教ゆべしぺ夫我が衆の準提陀羅尼くんを
修ぺる者を個況在一旦の罪業を滅するのくふ
らぺと過去無量劫よりの造罪を消滅もるぺる甘
文と曰く曩謨颯颯多南。三藐三没汰倶胝南。怛
侈也他。唵者禮主禮準提娑嚩賀。ぺる者廣ふ
咒ぺを至誠間断なくふ教をもくぺて唱へて後ぺん
にくぺのやうに教ゆべて唱へられよ然ぺるとき八彼の
虚空を相の代ぺるくふて唱へられよ然ぺるとき八彼の
よ然ひ分きて神明を感動ぺるぺる實よ走る

馬よもちをかくべきそうしてやこれき。
○伏去曰く又那謨薩達摩芬陀梨佉素怛覧。
とそる秘文あり。文字おくして而も柔きの咒
文よ勝るそる萬くるそう。孫ら随く唱ふべき者ら。
予始へ學海と号そ雲谷禅師の去冬の說を
筆して忽ち一人を勧へ再生の身ら学ふをも
記す。今日の我が身ハ此ときでおそほーれ凡くな
了れと改ら。此意ハ此ときでおそほーれ凡くな
ておそうーるをアスた幸の凡人の旧里ふるらぬや
うれーこの識の為也ざて予世の中にうけさろ無く。
あくべかるそふ学せーぐ。一夜雲谷の教を得てう。

行ふそくそう恐ろしく祭り客室の内ふ狩り居
てもぴうかとそろーくべ男鬼神の崇を受くべきら心中
ふ思てふ世の変除を扱出でく。天道ぼうれ公そう故
ーや次第くふんもちろ大恢ふそう。くふ譽られても。
又ハ謗られても。其ーこ苦ふるーさるやうれ公まう。
鬼角して芸亟年平ーく京ふ在く。選りくふ名
ー生そくそ時老人の占ふ当三度目とこーぐ。
打誠く当一ふ選び出されうぴ時そくや易道の
信仰へそうて禅師の去冬の說を性よぴこと比て
ぞくそう。然もどもと。擱我ら身を者ふ混る。

願る多し。或る事に臨んで。行ふべき義をえんてう雪むしんおく。或る人を救へんと勢て若事をなす。或ハ解ける。ハ大事をく思へた。醉後ニ放逸のまゝ多のつみふ。ニ子の若行やうくニ綱ひ。年ゟ空ゟんなどゝ請待して。東堂の禪堂ニ於くニ千善の供養して。天地祖先の德ニ報ひ奉りき。

此ハ又子をおゐ願文を捧げて。ニ千善を勸むと。拙き願をゝてゟ。爰ニ憂ニ年幸巳の年ぴやゝ方が生れゟ

予一善を行ふごとに。其一ニ帳面ニ記ゝ。其方ゞ母を又ゟれを助けく。或ハ多人ニ施し。或ハ鳥類魚ゝの。生きる物を。買て放しゝてゟゟし。故ニ若をとりく。但朱筆にく〇印を付ゟ。此の勘ニ。一日の内ニ八十餘〇ふもゟふ多ゝ。足ニ困て癸未の年八月ふゝて。廿四年目ふゝや二千乃若行ゝと滿足せゟぴ。ハ法ニ人を私宅へ請待して。ニ千の若の供養を勤めゟ。甚年九月十二日又

衆人ユ石ー歩ごとうんこを祈く。善事一万條を修り行ふと。死又一年を延ル事ヲ得ル。其年目丙戌の年に。寶坻縣の令ごとう文ふ仰せ付けられごとう。予此物り白ふ紙の表一冊。治心篇と名けて認め。毎日ユ朝ごと七ツ叮ふ筆を執き。裏ごとして表向の左衛へ出て。其これふ性とも右の治心篇を打来て。其の上ふ毎ごとう座ふおいの若おーの悪しくそも。ごとくごとくそ叮治心篇ヲ記し。夜ごと宋の趙折ユ敬ごとく叮篇を卓ル載せて。庭よ歩く。名を焚て天ユ向て上ごとう。足を毎日の格式ごとせ。

予ふ誘ごとうやうハ。篇く小宅ふ打並んで。勿ろし叮ごと洗手ふおい助ごとく。若事をごとう。若事も。報答を待どしてごとう。成就ごとう。當叮ごと術設ごとくごとくも事もげくごとへ堂部至も間をく相隔りごと。仮ふのごとれべ下も部ごとをユなりて。善悪吉凶ごとう。ハ十萬條の若事。ごとう發ごとうそ。ごとう發ごとうそもげくごとう悔こけり。予も幸ごとう叮ごとう。ごとうごとうごとうごとうごとう。石ふ仮の義をごとう。ごとう予がお一ふ来て立てごとう。予毎ごとう右の篇の毒くふ向て。右の篇の毒くふ向て。ごとう發ごとうれバ。ごとう人の罰ふ減ぜ。ごとう一節を

叮ゟ金かゝんとゝう予ハ考ゟゟ余ゞゟ
分一町ゟ分き二分四厘七毛ゟゝゞ此差の若を
宜く拵百姓へ舶を流して今年ゟゝ一節を減して。
一分三厘ゟゝと定やゝうと。然をゞゟ差ゟゝんゝゝれ
のゝこのゟゝをバゟゝと行れ大若ゟ発ゟ事ゟや
落ちぬる者と思ゝゝんゝゝ若又基の幻余禍
師ゟゝうゆゝう。予ゟゞ喜んでゟゟを若ゝゝべ禅
師の曰く善心真切ゟゝバ一行も萬善ゟ勘ゟゟあ
望。寶地縣百里一方一里四方の内の百姓ゟ一節の稗を
減ー喙る功徳ゟれバ豈萬若ゟ高らゞゝんや。況や爰
中の告とゟれバ天ゟう告げゟゝう。何の疑ゟゟんや。

とゟれゟう。予ゟゝ後も浮ふとゝくを重して。(脱)
ぜんよ若救ゟ満して知ゟ
ゟく衆僧一万人を待して。右ゟ若の供書を遂げ
ゟゝて大の老人ハ予を五十三歳八月十四日丑のゟゟ
死ととゝう。予敢く喜令の祈ゟ終ゟ不ゟ十
三果の内行の頓もゟく今年阮ゟ六十九果ゟ成る
う。聖人の曰く。天難諶又曰。天命靡常又曰。惟命
不于常と云ゟ。足ゟる生れつきの天命も。ゟゝくの
不ゟ依て定ゟ安きゟゟとを云也。又曰。作善天降之百
祥為不善天降之百殃ゟひ又禍福無不自己求
とゝう。足ゟ皆己ゟゟ依ゟく。禍と福と

ことごとく明證ありと皆聖賢の言ふ何の經よりきたるものぞんや況や予自飽までに味ひを嘗めて知るをや今ふたゝび一點の疑ひなく改むべくんば豈天命といふべからんや若し改むべくんば天命の幾に因て改まり定まるものをなんぞ聖人の教ふるに及ばんや是故に身をおこなひて行ふべきの方未だ若輩者なれば父母師君と仰ぐ人の教へに從ひ信じて疑ふ事なく又甚だ天より受得る命教に依く若くは富み居るものゝ如くんば常ふ落ふまたなる者のんりらとせよ若又行事も甚だ方ら思ふまゝに行ふも於くも爲をとらんより

しう妨害などの來ることあらんやふたゝび若くべくんば若又我代らふ事なく極く貧乏人のんりらふるべくんば若又人よ愛し敬ひて身とるべし我を行の德もなくして此敬せられ勿體ある權門と成らば畢竟徒の退のごとくをとるべし若又世よ打ちくの人も知ることなくして設くべくんばそれを世よ打ちくの人も知ることなくして設くべくんばそれを世よ打ちくの先祖の德を輝すると思ひ上ら國の恩と報ひぜんるものと思ひ下ハ家門の繁昌と頼ひ外ろの人の急弱を救くんるものと思ひ内ろ己まづ豫而これを要さん

るを思ひ日々に己まざる非と知りつゝも過ちを改めよ一日已まざる非を知りぬれば一日已まざる者也と駸々日過ぎ一月過ぎ一年過ぎぬれば一日若干と知りぬるをよそにのみ天下にたぐひなき学者多くとも自身も徳義を損ぜんとも思ふ人も稀なるをよそにのみ仏の悔る不生不滅とやらんの天命ならんと外よゝ定めまゝ天命なるを知らざる者ぞ愚なる禅師授くる所の三帰の説ハ至精至遠至真至正なるを聞て勉て行よゝ自ゝ空

謙虛利中 後ハ人ハいんぎんふるまひつゝるゝを虛と云ハ図星をさゝれて腹中にもかまへてゐる悪きこゝろを指入れられてる者也利中ハ凡その人形いんぎんぶしつけ〳〵つゝるゝ者多ハ是外よりおされて形も自然といんぎんまる者多ハ自然と大いなる不図星をさゝれて内心高慢にて形とはとゝいんぎんぶしつけ〳〵つゝるゝ者ハ自然とよろづ形ろぶるゝ者ハ内心の強邪なる者ハ自然とよろづの人かりて内心ハ高慢にてぐ〳〵不相応なる悪事を仕かけてる者也謙ハ形と心とともに卑下して慢心なき事也勝ると勝ると勝ると勝ると勝ると勝ると仏陀ハ特よ厭悪し給ふ謙ハ是と対治して悪くき事也神明もよく〳〵なづきこゝろげきこゝろと解せざれバ不給形とくんと内外一致して

易曰天道虧盈而益謙地道變盈而流謙鬼神害盈而福謙人道惡盈而好謙とそう云ハ意ハ盈へ

ざるう利根發明十分ならざるもの
だと思よて笑ひ侮りて自滿をしゝ遺人ハ殘さ者
よ驕りて富る人ハ貧者と驕らなと皆盈の字の意ゝ
謙ハ即ち謙虛のこゝろも地のこゝろも滿てハ虧
けくこゝろ日月星辰の運動水の東と流ゝ湖のこ
ちゝ其他大山も備とこゝろ江河ハ丘とこゝろ
皆貝おのこゝろこゝろよて人乃のこゝろ惰を惡んで謙虛
を好こ愛こゝろゝ人情のこゝろよ及ぼこゝろの
こゝろ。但し鬼神の害盈而福謙といふのこゝろ乃
ゝ〳〵あゝこゝろるゝ。鬼神と云ハ何のこゝろよそや
言のよゝそもゝ〳〵せるのお約束ゝもよゝを

仰げバ限ゝこゝろ者ゝこゝろ然を大おゝ〳〵免ふ惰をて
そゝくゝろゝ者ハゝゝゝ人をあこゝろ辱もゝこゝろの
こゝろ。よゝくもゝ化ゝ被こゝろるゝ人ハ我々
惰をこゝろ才智藝能のこゝろよ依こゝろるゝ人ハ
よゝ必ゝこゝろゝゝよゝを仰げバ限ゝこゝろなゝこゝろるゝをもゝゝざれ
ゝ故ゝ更ゝ人ゝこゝろゝゝて才智藝能劣れゝこゝろる人ハ我々
不調法者ゝこゝろゝ云ふ故ゝ。自然ゝ謙退ゝてゝこゝろ惰の
人こゝろゝ故ゝ才智藝能ゝこゝろるゝ人ゝ對をれバ劣れ
たゝこゝろゝ人ゝ反て有德のゝ人ゝこゝろゝ。然をバ不德ゝ必ず
の身こゝろて有德の人をと侮ゝこゝろゝ豈大いこゝろ無待な
こゝろるゝにあゝゝゝや。中ても富ゝこゝろる人の家居衣服こゝろ

ざう。進興飲食ふ華靡を盡して貧ふ人ふ驕
ふ互ひに爭ひて自ら樂ともとふ人くの常情ふ
きぐも。神明の方ふて八大いふ悪こふふ人くの
世のふの富貴を積ふ八大の隔を極て榮綫のふ人
と呂下にふ下ぐふんぐ居ふ。ふふ人ぐふ人百人ぐ万
人ふ居ふふんおふとが悪きふのふも知ぐて鬼神
ふう眼ふ付けふふるふふ人ふ多くふふぬふう。又書経ふ
同。滿招損謙受益とふふふ悪ふ八天地
鬼神とふふふ悪ふ八天地
ふれるのふ生ふまふふう。然まぐも本と滿ふふふるふの
故ふ我ぐ悪ふ八ぐ。我ふぐの者ふふふ付ふ

ふ付ても不如意ふふふ八悪報を蒙ぐて貧ふ人ふ
悪報を怨ふ怒ふるふふ八天下のふふぐて反つくふ天地
又譴ふふ者八天地鬼神とふふふ八ゆく故ふ損を招くふう。
事ふ付ても爭ふふ八ふ哀憐せふふ故ふ付
き故ふ爭ふふ八悪ふふ八ぐ是皆仏神先祖の御うげ
ふふんと讓る故ふ益を受ふう足を滿招損謙
受益とふひふふふう。又易の地山謙の卦八六爻ふ
ふ皆吉ふう。一卦皆謙の卦ふ故ふう。予ふべく邪
ふ圀ふふ在ふく。貧ふれのふの出ふふ者をふる
ふ必衆人の中に各別同だふて謙虚ふる者ふう。因
く一二をふく現證を示さんふる幸ふの年の計備

ふ私ニ曰ク計倩ハ楚國ノ役人ニ年ハ二百年ヲ用ヒテ
次ヲ以テ及第ニ成ラントスル者ヲ計倩ハ門ニ
倩ヲ待ツ者ヲ意ヘテ計倩ヲ訪ヒ來ル。嘉善ト云ヘル
諸生十人ヨリ其中ヨ

○丁敬字ハ年ヲ寂モ
ヨリ予費錦坡ニ向ク語ラヘバ丁敬字ハ今年必ヲ石
生ラレン費錦坡ガ曰ク我ヲ以テ古ヨリ謙虛ノ者ハ能ク天ノ福ヲ受ル
ヿヲ。所ニ賢能ノ十人ノ中ニ敬字ガ如ク愉ク勤ク
ヿヲ。真實ニシテ
敬字ハ恭敬順承ヲ以テ
ヲヲヿヲ小ク謙畏ヿヲ。物事大事ク

人ヨリ乞ヲ
ヨリヤ又受侮不
ラレテモ。甚ヲ敬ガ
テ。人ヨリ
ラガ如
い用ヒ
冤枉ノ助ケヲ
存ル也ヿヲ
○馮用士ハ幼年ノ時ハ
ヨリ予丁丑年京ヨ
ヲ居ヨリ。予不ヨ

して。幼き年の時のくだり。いとお遠くてそぞろに。謙虚者ならずや。

○李露岩が予ら友人のなかにて。謙虚者ならずや。

予猶試んとて。こころひそかに。諛辞をもちひ人のかたるを聞いるやとこころみるに。

設けくも。ちかづきうやまひけるふぜん人面色微塵も変ぜざるは極厚の人ならずや。

予ら曰。狗のまるも。猫の来るも。必ず前表ありてせんかたなく者とり。今我が足下と罵辱せしに実に試こころみり。然るに足下必ず今年の謙虚。平生より十倍せり。天の助るなり。果して予らごとく如くきを。

○趙光遠は山東冠縣の人なり。童年の時々学よりおく撰びおきたるところの人なり。その父嘉若ところの。奉行となりて行くに。趙光遠も父に随て嘉善へ行きぬるに。銭明吾ところの文を持ちて見せられ。銭明吾ところの舎務も多く。筆をとりて文を教こふ。直して反古のやうなるところの者ども。大いふ立腹こべたよ。光遠をおしも怒りの気色もなく。反ておおごに喜んで。甚だ直しの通りこふ改めるべきの謙虚者故ならや。その生平之所ならん。

○壬辰の年。予參内せし時。貢士夏建。予に告しに。其人ぐ〳〵甚だ卑下謙退して。真實愿慤なり。予友人と倡和して。花を矜り人と福を與へんとするは。へ福を與へて。先づ好名を求むるの人のみだと変ぜんこと。考へ。佞の者は勿論。実愿の者は。好やうでも。人爪の者は。俄かに此と乱るゝをや。況んや初父兄を親もちゐん。仏弁をや。敢て寧信んぢ。我るべきの類なり。今夏建に逢ひ。風采と。こゝろ。極めて天稟を。うばひ。こゝろを。選び出されたり。

○江陰の張畏岩は。名ある学者にして。文章の名人なり。己卯午の年。南京の鄉試の時。文章を以て。主司に極めて第二名第三人に下るべきと思ひて。其の卷を。或る者は寓宿して。こゝろを。ゆるして。第二名に。畏岩を。きゝて。張畏岩の張のごとくなるを。畏岩大に立腹して。其時の執者を睚眦の者と。こゝろ。ゆるさゞりけり。二人の通人を。在て笑ひ。止れハせんとして。反て喉を。こゝろ。ゆるして笑ひ。これ畏岩又通人と。取てうらむ。汝行の友と為るべからざるの人の曰く。我を足下のやうなる愚父者と。人云ふ。及第を望むべからざるの人畏岩

腹をたてて汝ハまだ一面の知る人に非ずと本より又
予が文をとがむる事ハ狂わるゝといへども何故に妄に悪
文なりといふや道人曰く夫是文ハ人の心を繪き出
せる者なれバ作者の志気温和にして七情しづかなら
ざる時ハ其文自ら粉々たる者なり今足下の判者
と爲ハにせらるゝ辞気を考るに足下の狗中甚く卒か
なりど其不平不公のくせを繪き出したる文なれバ
まづ足下の文をよんで是己々を下手文なることを知
らざるといふなれバ畏れもさることの者なれバ此一言
を以てみるに我をおりは道人不底の者に非ざと
思ひ偽りの言を改て只今の無禮をと侘免ありて願く

ハ慈悲の教を垂たまへと謹でやゝありて道人の回孫室
くはしく書りなくとくと見ておきさべし凡そ人の
身の上ハ一定の命數ありて足下此度榜にのるべき命
ならバたとひ文ハ拙くも榜にのるべし又此度榜に入ら
ざるべき命ならバ足下の文章いかほど巧なるとも
書まても榜に入るべし榜に入ると入らざるとハ命
にあり文章の善悪ハ二の次なるなり足下若し出世
に志ありならバ此のんはそて出なるを　愚岩曰己に一定
の命あるなれば出世とてもの文章のよし下手に因らぬこと
といへども何ぞや妄んして近くへきるる先生何をか改
めよといふや道人曰足下実ども遺命者なる天

立つ者ハ我也。と云意ハ今ハ我より建古
をる者ぞり。建立して成就をる処を。天命り印可
して。其通りに宝やう成る家を。天命と名
づけたる者ぞり。實ニ我と天とこしらへたる非ざる
もの也。云ゝ譬へハ小家を大家ニ改め造ら如しおれを
造る者ハ天ぞり。大いぞり。材木を伐る者ハ我ぞり。我
木を伐へぎる者ハ伐りの小家にて一生を過を
是別生来一定の天命ぞり。若大家ニ改めんとをる
者らバ。我本の用ををる処ぞり。材木の大ふり。伐く
家も随ふ天より造り改めるよ者ぞり。小説と云
ハ。皆皆らバ〳〵自今ハ後若輩の材木陰徳の材木を
集め。足下の不平のんを改めて謙虚の材木を
積集めて。是までの破を高客の大宅ニ造り改め
の大工。豈改め造らめやと打笑ふなよ。朱門
の大工ハ。天命造化
ぞり。
ニ材木をうゑて。其を伐る処を一定と云
ひをる者ぞり。もろ〳〵天命の経ぞりをうゑるものハ
我ニ囲て天命と云者ハ我ぞり一人の若ふ伐ぐ
度も天より二豆をうゑも生ハ二豆を改めず。其をうゑも生ハ
常ニ改めて仰可しぬ。天命ハ
ふ極ふい。そうぞう誤虚ハ改ふて務むぐ。精ふハ貧

儒者ならば物を施して陰善を行ふなる種なれど。如何道
人曰く若事陰徳は必ずしも物を施さずとても限らず
但しの受用に依りて自然と其を施すとはあるなり。
且く此受用の中に。謙虚の一事の如き二徳を兼
ひやかにして世界の人に物を施すをしあつるなり。謙虚
といふは只人によりくだるのことにて依て其ゆゑ
廣くいへバ萬方に亘ることなれども。姿をとゝのへず身を
好衣を着口に山海の美味を含ひ。家居は奇麗
美を尽し。又おきくは頭髪衣帯を飾り華やかなる物
を懐中し。櫛なる佩挾月は美麗をこのみなし耳に
濡衣を安らかにしても精を尽して歎ひつ奔ひつ

その外一切の法ある奥になるまで。一寸も人に負まじ
とすげに争ふ事。之を口にいふは情慢なり。此情慢々
深き子細あり。そ人の村里を云ふに及ばず。天地
世間の人天鬼神への無礼にあることなり。此情慢
のうらを謙虚といふなれバ。右底の一切のことに付
人よりは内證く却步して謹みやるのことなり。孔子
の恭倹を至徳と誉めまことにたまふも此謙虚を誉めたれ
まことに又道人の山林へ隠れ佛者の三衣一鉢の
貧道を行て乞食をするも。此謙虚の至徳を修行
するのなり。因て謙虚の二字を行ふ者は美味を
食さるべき身分の者。一日美味を含せざれバ一日

甚だ味を世界の人夫鬼神へ譲り與ふる成うと。
又好衣と衣う程ぬ人の一日も好衣を着せざれば。
一日も好に衣と世界の人夫鬼神へ譲り與ふる程ぬ人の大宅を建うと
て小宅に住とも乃至一月一年十年百
年うても。そうとはぐくう共若し
きうとうくう。甚だ外一切我身の為に奢
へ譲り與ふる成うたうぐ甚だ外一切我身の為に奢
るときうを止めて世ぐうへ皆世界の人夫鬼神へ
譲り與へ奉うる。因て謙虚をもうへ
千万の費なくしてそ施行天地の間に滿うう

故に孔子も至徳と参り下行うう
の大道と知ぐうやうに
めだうて。妄りに判着うを
此と守て大いに感悟し
のんの垢を洗ひ捨く若事徳行日く
丁酉の年にて或る
圖甚だうきを造うの
て彼の及第の時のく
畏岩能く披きうれそ
うの一家ふも疑ふ
人の曰天よりく

盡く記錄とるゆゑんなり。甚中次及第の二名ハ二度づゝ考校あり。同じく及第とぞ。者よみて。徳を撰ぶ。答ふる者ハ皆ハ帳面のうへのみぞ。中更に名のうへ二ハ及第とぞ。不合のみを行て徳を撰ぶ葉を削り去つたるこゝ未の方の名のみをぞ二行を指てぞ。汝三年以来取持ての如く慎めり。因て此一行の内一汝ら姓名のみぞ。猶く務めよるべしとつゝ果して首中の帳面の次第の如くぞ。甚中ハ選挙三百五人のうち。次のみをぞ。く〳〵頭とぞ二人のよ次にて神明歴〳〵たる。

ハ皆我ゞ系行の内名を取り依て彼神明の逐一日ゑ仁視そなはして賞罰詩と處置ものとそう處心屈已へうくそう者ハ甚ぞ悪いくげ。く愛とくきこ者ぞう。此一段〳〵くのみも仏神の御意よ合ひんと志して。ぶそ〳〵ぬ。うよ真實ぐう謙虚とをして福を受るの基を建ることぞ也古語よ云有志千功名者。必得功名有志千富貴者。必得富貴とぞ。ぶんハ國家よ功をぞ。末代揚んと志をとそう者ハ後よ必ず功名と遂る者ぞ。又富貴よ志とそう者ハ後よ必ず富貴行よれの志の急ひをく張ぞよ依ること蟻の

念も天に通ずるといふ信徒も亦之と同断
なり祈るとは誠を遂るといへるものなり志
の深きが樹木根のかたうが如くなれば招かずして書言をも
ば終に必ず大木となるが好く心安きを我と者は鷽
石の志ともよく念ずれば謙虚にして事に物に不争徳
を積て天地鬼神の喜ぶ合ひ天命を造ることを
今の及第を我と者は学ぶ校ひ勉ふう
真の志なるに非ず一時の慾向に依て文を作く
也 謝詰お句の黙をとるが如くなるもの孟子の曰く王の好楽甚
齊其庶幾乎ばんい音楽とは今時の楽とは

ちがひ古への楽ちもそ音とつゞく虚空ようの
音ひびき巣もとどく敷も亦動く鬼神を感
格し天下を治るをいふ禮楽とは古へ天下を治るをいふ禮楽
大学にかゝる事なり然るに齊の宣王楽をぬむ
根ざすかゝる者に根ざすを書ひ書て真の古楽
と好むやうに成ては鬼神の助けに依く
齊の国も四百余州の京とゝもとゝくとゝかゝんとゝもう
予此孟子の言に依て及第の業に勉
も但謙虚の一事を忘ることなかれ志を立ては
育て謙虚と好むべし天下の宰相離

句の信ふ容ろうんと存る也。○私ふこ自
ふの一人を謙虚の一行ふ固ひまべ。天地鬼神及ひ
人間の神祇を感動さる処を知べしんこそ。其の
孟子を引く狄ふ実勉の勇の聖語の処へ結帰せ
そのみう。

積善ふ篇ふ善事とあるを積ふ徳を功空かそ
易ふ云く積善之家。必有餘慶ばんへとの処ふ当
もる如く。ふこを積めべ必ふ多の慶ひ来る筈ふ
の徒ふこう。昔魯国の顔南とつう人娘三人持て
ふ甚内一人を孔子の御父叔梁紇の妻ふせんこそ
三人の娘ふ倩る処う八叔梁紇の先祖を代く賢人ふ

く、して積ふ有の家也。叔梁紇年老ひてうつく丈
ふ人の妻ふこべ必貴きふとて家ふ学人
べ。彼ふ往くべ行ふやとこうれべ三人目の徴
在とう娘ばふ孔子を令跡して叔梁紇の妻とう。
やがて孔子の母ふこみう孔子の御先祖ふ当
つべ魯士の家とう国の大名ふてかくべ。第ふ国
をゆづりて甚身ふ国下となりう甚子孫ふ勤の
家ふる事ふこんふ挨拶ふこそ。結句八外くの臣下のみよ
ふ八大いふそうざうふ甚家の家風となりつく
代く謙虚ふて徳ふ積ふこふ。叔梁紇へそのふ孫な
る故孔子の如うふ大聖人も生ふこをるべきうやと

あるして。微在の公文憲甫の物語りもうしたるの也
家語という書うもの又左傳
次下の帝舜の二事へ積善の家ハ餘慶かりし
中ハ古今第一の冠頭なるべし。故ハ今篇首ハ引
出せるとこ。孔子帝舜の大孝を說て曰く。貴為二天子一。
富有二四海之内一。宗廟饗之。子孫保之。とのべり。
帝舜孝行の大なる善を積こと故。天ハう四海の
天子とうこと。崩御の後も御子孫繁昌して代々
子孫の榮とうけのよぞこと。此等皆積善の家
ハ餘慶かりし現證うつぺし。今又近来佐久の件事
とりく。積善の餘慶あるもとべし

○建寧の楊棠と云人。祖父ハ貧家にて代々
漁師をなりわひとして。或ハ大江或ハ大湖
溪れをひろく漲出て。或ハ海ハ未ハ引き流る
うづく流くる人もあり。或ハ家の内ハ居
うつぺし。甚ハ流くる人ハ救も知ぬうち
ぐ。資財道具ハ障子舟ハ梅さへ。而く人うち用もの
えもうぬ。ふしの楊棠が曾祖父と祖父との三
人の親ハ左板の死おうをなげうくぺうと
をなげうくぺうと歎ひ助けうう。俗の人くも
指ざしもうく。馬鹿者ううて笑ひそうくぺ。然ども

ことわく仕合よく終ること。節ハ餘ることを身上ともうして暮せとなり。或ハ異人来て揚栄ずよう語ることなり。汝が祖先大いなる陰徳あつて孫子ともに尊貴となることなり。揚栄生ずるとは及んで果して二十歳のすぐるやな第一にて天下の極貴たることなり。汝が祖父も皆貧賤にして先祖を耀かしたる墳墓ことごとく塚へ彼まろ先祖の墓なり。諸人のあつまる甚方うもなく勢ひ多く皆賢者となり。今の郡縣となり。処の官の厳粛ことごとく畏ることなり。

○揚名微とは者へ鄭縣とは処の官の厳粛ろ下ま

吏みて畏ることにんうて公事方よ付て偏頗うた者なり。或時厳粛一人の罪人を捉ち血ることなく衆よ備また怒りの氣猶盛んなることなくわびうれば微其衆よを犯し其上よ我まよ忤ろれ非ざること答よ自微頭を地よ付けて同く。傳へある古へ王道の世よ最寄くよ師近ことよ立てく聖道を教へよ故よ民人皆正直うて法度其教へ方よ於て故よ百姓正直の道と知ることを花をへよよ立つ人の罪人を、吟味して、假今罪人を落ちうれ不仮ことよ

べし。されば柄と思ひて喜ぶべきことを戒むるものと思ふべきや。怒りもまたかくの如くなるべし。言ふべきことを盡してやむべき嚴らるゝ樣とも覺へざれども肅も道理を伏して物うの氣和ぎたるやうそれは自從たやうのくんだてのものうけ受ざる。家又た來負なんどと決して其の食物の乏き者をへらせられたるに牢者の内そ朝夕て懶へごくめり。或る日彰ふ來る牢者の者救人かう。甚だ飢よ及べる樣子なるに自從ふ家杉節飯米乏よりそ。眾人よ食をと喚んとそれば家内の食物なるべしとそれば其妻ふ相決して人へ宿の近き者たるやうを方の者うやう自從ふ日抜とよ如ふ來まふ飢つれく救色皆菜の如くうつてなう合しのまを拾ひ出して。踏ふたきそ眾人よ含ひめうに平生の惡若行皆ふのやうの慈きうふ。然ふよし自從二人のよを持てう。熱久守陳へ北京の吏部侍郎と成りぶ男守趾ち南京の吏部侍郎と成まうぶ二人の孫を生でぶ一人ち刑部侍郎と成りぶ四人ち四川の廉憲とふまう。而も四人俱よ名ふと稱せられく各ふち抜て高官大祿をはうぶ今名ふ紀楚亭得うとも

其子孫なり。
○昔正統年中に福建の鄧茂七と云者亂を起し沙縣といふ処より延平といふ処までの所々く殺西皇の向に蔓りて此に随ふ者甚く夥し此に依て朝庭より鄞縣の張楷と云人に仰せ付られ謀をもつて鄧茂七ハ縛めとられたりぞ後猶餘黨多くありければ布政司察の謝都事といふ人に大軍をもつて討られ捜殺すべしと仰せ付られしが此謝都事といふ人ハこのごとく仁者にておはしければ何とぞ人を損せずして取り治めたく思ひ竊に帳面十冊こしらへて又白き布の小旗を数千本こしらへさせて餘黨の中

の然るべき者を招きよせて諭て云く汝等元ハいづれも擄せられて盗賊となりたり今よりその非を改めて本の如く良民となるならバ我一命にかへて救ひ助くべし然れ共それぞれ公儀に叛く者ハ是非に及ばず罪科を改むる者あらバ汝一々に此帳面に記すべし又此小旗ハ先非を改むる者共の門戸に建て標とすべしとてつひ含められバ其者共此教を聞てそれも有り難き事に思ひ暫時の間に觧集餘黨の者に傳へられバ大ねの鄧茂七ハ已にとらへられたる事なれバ我もくと皆其帳面に付きそりさせて又謝都事方の軍兵どもに戒て同じく是をとつて疵を付たる

者へ曲事たくべし。況人をあやまたる者へ殺して許さるゝ事は文向き小旗のごとくなるべし。老若男女を撰ばず、ふるまうべしと觸たり。是に依て謝都事幸に助られたく傘を今に及べうとせし者一萬人に及べうとぞうの陰徳故や謝都事ぐ子謝遷へ及第の第一よそうれ通よ宰相の官よ升まう。其孫謝否へ及第して探花郎とぞ。第二まの狀元升まう○又同じ福建の林氏の生徒よ甚悪係き老母あり。考くの家仇しが方よりて人團子とぼくよ依て貧人乞食等よ與へたくぞ。或時異人かりし老母のん俄の悪疾んう。名醫の施行う試と思して毎朝

未て蚤よ六ツ七ツ程づゝ求り食へうぞ。此の如くする事二年ぐらうのるうぞ。然を此老母もしも憐氣色うくんうく與へたくぞ。彼の異人老母よ語て曰く我を二年の内ら此ら坐よと含くうぞ。此よ因く容と大いう報たくべしぞ。汝若しも後悔所の後よ當く其の処よ葬るべしぞ。汝う孫の官祿をはる者。麻のごとく一升の数おどるべしとくう果して其高座甚永くうぞ。九人出生して大官よ升まうそ後代く富貴安栄うぞ。今よ至ても福建の林氏の一門とさくべ及第せざる者なしといふぞと諺よ伝て

○馮琢菴ゲ父諸生たる時冬日早朝小起て其邑の学校へ至るに一人雪の中にすゝみ来りて伏臥たる者あり。不便のことに思ひ己が衣服を脱て著せ肩輿をやとひて家帰す。後ひ甦らしめたり。其夜夢に神人来て告て曰く汝一人の命と救ふ事は汝と義理ある中に非ず。汝が誠心より生じたるなり。我其寮にて輔琦をけうへして汝が子とせんとす。汝速に生涯よろしき所に往てそだつべし。輔琦と名けて立身長久にして大史の官に升り其方も亦る家の馮氏蕃々史星あり

私に云輔琦とは宋朝の賢臣范文正公の事也文真寶の中の書錦堂の記ばかりの賢徳を述たる也

○台州の應尚書は壮年の時山に籠て学文をせり。其邊夜々兎の類集てやゝもすれば人を驚かされ應尚書は氣象者にてかゝるものをそれざりき或夜鬼神の妻とて美しき女の来りて尚書の家の婦人其外他国へ行きて久しく留りぬれば尚書やゝもすれば人を思ひ出すこと切なり。然るに強て他へ嫁入させんとす。此婦人貞女にて合点せざれば媒妁の婆なんど言へよ言へよと責ければ婆是を迷惑して頸をくゝりて死をせんとぞ。此婦人是を聞きて尚書の

まづ我宅を他へ入り代りて妻とこゝろみよう
應尚書佐くゞ宅に不在の夜の内
ふ此彼を頼こゝに自分持ち来の田を賣りて白金四斤
をかくしてさて其まゝたゝ人の偽状を作りて白金四斤
を封じこめて返牛にて逃げ行けねゝべし先此金子と指こゝに
作ゞなゞく書きそこゝに永へをーたり。彼翁姑対とひつ
きそこゝふ其ゝふ跡の直筆に非ゝるやと疑ひこゝをも
大切の金子と拐ゝかゝる我ゝふ相違ハあゝまじと
信じて遂ふ嫁入ざゝことを止やよゝり。果して往なく
其化ましうねりて本の如くまゝ婦となれりうり。
而も金と状とを送りしゝ應尚書ゞゝうまでゝ

うまでこゝろみ門親子ともふ絶不仲者の為ゝうまでを
知ゝばうり。應尚書又或夜鬼神の語ると聞けゝ鬼
のゝ云く惡学生めゞ一大事を始たりとふゝゞ一鬼の云
く汝行ぞ甚学生ふ恐ゝ敢ざゝや。一鬼答て云
くゞそれべゝそこまで思ゝども。天帝ゝう此学生を陰徳の
尚書と令ぜゝれゝう。我等行ゝてまゞそこをも
んやとゝゝう。應尚書此ことを聞てさそこへ我此度一人の
婦人を助けこゝる陰徳ふ依ゝく。やゞて尚書の官ふ昇べ
き寒微を與ゆゝさゝうゝてハ固果敢應の道理を
おりゞゝく畏き者ゝくゝとて。愈若事を行ひ或を必
ず辛ゝふ柔毅を施行ゝ。或ハ親類の内急就のもと

ならとかれバ。萬方に及ひて救ひ助け。或ハ人の争ひを無理非
道を言ひかけ爲りけられし足皆我か徳の薄き故
なりとてかしも怒られ受傾へり。其ハ仁厚寛裕なる
る皆此類なり。其ハ後終に鬼神の詰ふたぐひむと尚書と
云ふ言に升しかり其子孫及第せる者今に累くなり
○常熟の徐鳳竹か父ハ家中る大富人なりし。一年大
いに飢饉なりけれバ。我下作よりなりかの作徳なひ
たくしかりしを皆ゆるし許して。外くの貧百姓
なる人も。色く勸諭て皆く許せり。其上又我が蔵
を開く。米穀を出して盡く施行に引かり。然る処或
夜鬼神の聲と覚えて其門に於て唱へて曰く千不誣

萬不誣徐家秀才。倒做了擧人郎。とて云り此意ハ
徐鳳竹父の善行に依て。當身ハ公儀へ召出さる
るしより。此子の公儀ゑも未だ御存なし。然き内に天
より定めたるとりかれバ倒做るといひ又此子千
に一つも違ひなしと云ることにて。不誣不誣と云たるな
なり。此の如く唱ふる事毎夜のことなりき。果して此
年風竹郷選に中れり。是に依て其父の善徳を積て
怠らず。或ハ橋なき処へ橋をかけ。或ハ狭路ハ廣く
し險路ハ平らし。或ハ僧に施し。或ハ諸人に出會て
んをとめして。善事を修すべき旨を教導せり。其
後又鬼神の聲と覚えて門前に唱へて云く千不

誰萬不誰徐家ノ擧人直儆到都堂ニ云ヘリ。風
竹梁ニテ大イニ出セシテ。淅西ニ淅東ヲ巡
撫ト云官ニナレリ。即都堂ノ事ナリ。
○嘉興ノ屠僖公ト云人初メ公事方ノ役人ニ
ハ。竊ニ平人ヨリ出テ獄ヘ仕キ。諸ノ罪人ト
理非ノ物語ドモシ。甚實情ヲ窺ハス罪ナクシテ
囚ラレヲル者若干人カ
ヲノ〳〵ヨリ訟ヲ
ヲ然モ自分ノ功ヲ
頭ノ刑部尚書ヘ達セラル。
公ノ書ナノ語ヲ聞ク味セラレ故罪カル方ノ

者ドモハ各賄ヲ入テ誣陳ヲル事能ハズ理非ノ
ラヽヲハラレヌ。年久ノ罪人ヲ免テ許サヽル者十餘人
ヨ及ヘリ。是ヨ依テ洛中ノ尚書ヲ智恵者ヲリトテ。
童ヲシテヲハシ法ヲセラル。是今ノ僖公ノ働ナレドモ
僖公ハホヽカクシテ。尚書獨リヲ智恵者ト云ハセ
ヲリ。僖公又此ヨ楽シテ尚書ヲヤトテ云ク。今都
ノ街隊ヘノ治獄ヲヨシ罪ヲクシテ苦ム者多シ。
庶キ四海ノ内ヨ定メテ横道者モヲリ。又酷役人モ
モ有テ。無罪ノ者ヲ苦シムルヲヨシ拷者ガ息
見ヲ以ヘヤヽヲヘ年久一度ツヽ勅ヨリ人ヲヲヽシク赦ヲ行
役人ヲ探ヒク。減刑ノ官ハ任ニ四方都鄙ノ役所ク

へつらひ。甚役人のきらひ方の理非を吟味するべ。
廣大の術哉然ども人とつくり。高書も五經も人と同
んじてそを取を云まへ娑婆同断にて竟ふさ儀ふ定ま
す。例傳公も大夜の四きく人なれべ減刑宮の人扱了
ろうをたり。傳公或夜の夜ふ二人来て告く曰く。
汝ら天令ふ一人もるー。然ふふ今度汝ら減刑の姿
周深く天心ふ合へり。足ふ因て天帝より汝ふ二人の
貴きさを。與へのよふうとつくり其後應壞應坤
應埈とそ三さ十ろれく皆高官となれり。
○地陽の媽去宇ふ七人ともてうぜ人目の子媽信
えへ。平湖と云処の袁氏の婿となれり。我等も袁氏

うて同姓の故ふや此信之と我等ぢなとそ。もと親き
明なるうき。然ふふ此信之公博学言才の人ふして考く
選舉ともれ九づの宿因ふやふく官ふおりつく
るをとはざうき。平生道家と仏家とを仰せ人へ。
或時浙湖に云処ふ移んでて不宗一寺の内ふもりに。
寺門ふ觀音の像有りしも堂もれく雨露ふさらさ
きて。廉末ふ極の風情なりられべ住之持し罪て忽。
堂建立の志なう。剃市著を拂く全十ふ名出し。
住持の僧ふ與へ此金を以く觀音堂を建立し式号
像を安置してなまらるべしと。僧の曰此大像
ふ彩くふ堂をふる。十ふの全まて功を修へんる。

来るのしくひくれば信之又錢の内を拂ふく布巾を
と衣類七色を出して與へなり信之の僕の曰七色の
内廐の袴へ新しき物なれば先ず不自由もあらん
はしめのくとつくへ信之が曰くぱ菩薩さま雨露に濕のいたべ
我へ赤裸にても苦しからぬとつて喜ふくれ
へば衣の袴淚と流して曰くぱ今を捨て衣を施さん
きのミ難きさまにも非だ。貴公ハ今の御一言へ安きも
容易き御志にて作ろみも甚だ志を捨て普請
せらんとのひきこが往ぬく結構に出來ぬる出來の後
又信之我等ごが父を招同道して芸寺に系侍して。
一宿ぬれを衣を寺の伽藍神信之が義まふくて御

して曰くぱ汝ごが父の功徳に報ひてぱよく孫〻宿祿に榮よ
べしとくぱ果して信之ごが父を招同道して芸寺に系侍して。
ふるまひをぱ馮汝孫馮擢馮芳皆之義
〇嘉善の支立ごが父ぱ足又公事方の役人たりしが
衆人の内に幸無して斬罪に處ぬる者あり。ぱ
哀をふ思ひぱ行をぞして助よくぱ給ふ衆
人ぱ。ぱ救をふ人ぱ。ぱ救をふ人ぱ。ぱ
又思ひ居ぬれぬ妻白宰屋へ食を送ぬるまゐれ
ぱ。衆人妻ふ向てよふ公ごもを給ふてぱふ
涙を流して妻ふ語ぱ。我ぱ方ふ一生涯乃
別いわくぱやうハ我ぱ宅へよふ公を招きて酒肴

ふんごろふお恫へ其方身を獄して支公を事ふ
公若し其方を意みるこゝ我が今或ら助る事も有
ろ〳〵とこゝろ。ぞ。まもまの生死の大事なれば迷〳〵
支公くさて夫の教の如く支公を請待してや
くりてやしけれ支なえうな大やうのんぞくのく
それば中く其妻のこゝろ後ぞ欲食のみてなり
ろそれてかをろ〳〵てそれおく終小斬眼をのがを
まのたう。其者室ろ夫婦ともれ支公
ぐ家ろう。頭を地ろ法けて同く。公ハ真ろ我が一命う
親ろ。ぱ大恩行をれろ報じまん〳〵とて血の涙を
流して一禮をぬ。さて早速ぞ〳〵ぞ。公今中年

も過ぬ。ぬ。狩ひろ子一人もなう。我ら若輩者なぐろう
娘一人りてう。我く〳〵公のろ一ぱろ〳〵。公己ぶ
我が一命を助のくる陰徳あるぬ。我ら骨肉をぶがち
たる娘をまく〳〵必御子を産のぐ。ぬ。ぬ利陰
陽感通の理救かてぬ公も
筆〳〵一子を引ふりぐ。ぱ感通の理をくよ
ぐろふ思ひやりて本書の禮をぬ近ろまう後渠して
支立ぐろを生ぐ。二十案うて甲第ぶ登り。翰林
孔周の官ふるまう。支立ぐろ支高ぐ子支孫
代〳〵皆おくれく。大学博士の官となれり。此
支の孫ぐみ大倫も甲第ぶ登まう。ぬ皆汝が末乃

あくう知る事なう。
凡そ此十條の如同しき善事を行者のよき報ひを得て陰徳
と積徳との別ちを云ば。耳の鳴る我には
のみ知くして人よ知らせめざるを陰徳と云。
故に陰徳を好耳鳴のするが如くなり。又
人に知られんと思ふもかすかなれど。但善事とさ
へ云ば勇み進んで務てなすべきを也。陰徳ともせよ。積徳
ともせよ。只人の事にふるまひ縁にふるまひ名實をとめる

れ實義に務行ふはら。諸の罪を滅して諸の幸
福の来るも是より早道なるもの也。且也同う
勤めて多くの人のよろこぶ事を為。
人に善を為すも易し。易しと思ふ
が勿ち害をなす。易しと思ひて我
順風に帆かけたる如し。又金銀財寶を為る者も容
易しと思ひて為ざるは益財寶を失ふなり。
難しと思ひて為ざるは百善も百福も来ること能ず。
かうの善を為すも善人顔をせざる。此を云の善
人とは云ぞうし。さて又事にふるまひ縁にふるまひ従て善を為
るも多端なれば。今且く其大要を云つく十ケ條

なり第一に與人為善二愛敬存心三成人之美
四勸人為善五救人危急六興建大利七捨財
作福八護持正法九敬重尊長十愛惜物命
第一與人為善とは言ふそれとおそれみえへ
どもくくの中へ打雜くだらぬ誘導るなり言霊
辭とつくる聖人れ迹よ居住志ゆよ付與を捕て高
貴ふとる者どもをこんゆよ。かき者ハ老人をお
ろ迫弱者ハ弱をやーのけて與の多くかる処よ
てそうそれべ弱者と老人とこそ與を捕ること
能わざるき。言辭不段のこと
ようちまりて。與をとろう

分與のこと。ひる処へ教へさとびきて。與を多くそれ
らしめ。自身を與のかきこ私ぞおくばうそうるゆ
又其不辨慚愧る者の中にだろうも。長
ちきこるをつく者ありきぞそ尾ふそれ付きこゆ大形ち
らこと誉とうしぞる又其中に眞辭の真れをえて。俄
今も儀つくる者ありきぞ。大いふ歳じ入たる額色尽く。
そ者を誉わげく。外くの者どもを励ましてま
ゆいくらに一年やどの後ろそ処の老若男女ほふ相
也ぼうて猶眞辭の徳ふツくこと也。此眞辭或時ら。
在迹よりて耕作志ゆよ陶師の聚り居ろ処よ。
居住志ゆよ付もりくぞ。皆大のよ陶師ぞ。

ひきゐべきとなり。聖人の辯舌にて教給へど。辭に不
足ることありされど愚痴無知の者は能く會得して
行ふ事能はざる者故。自御身をもつて教へ導き給ふ
なり。是則與人為善也。凡人とても世に處して言る
に志ある者は。為べき善事あらば。己一人の了簡に
せずして人にも勸めて共に為さしむべし。又己年
をさなりとて妄に人を侮るべからず。善事を為せばとて
人の愚なる事あるとも咲はるべからず。己藝能あれば
とて人にひけらかし悔しがらしむべからず。己才智あらば
大に深く藏して人にてらふべからず。人の過失あるを見
ては他人へ廣く露顯せぬやうにはからふべし。其上に或

は佛の罰神の咎或は主君或は親の權威などをと
摘に取て巧に誘ひ漸くに改めさせ。又人のお
しくも善事を為すを見れば稱美して進むやうに
人にも吹聴して其をやまさぬやうにすべし。又我一言に
も云ひ出し心の肩一言をも出し一事なりとも行ふ事我身
のよきを称美て及ばぬまでも廣く世界の人々の
師匠となりて一世の愚知を成就せしめんと志す
べし。是を天下の大人といふなり。
第二に愛敬存心とは仁のなす所の愛より敬して禮
のあやまりなく不忍に思ひ忘まじき事也
凡一切身に務りに當て或は其の節を度し

或ハ姉寶ハ隔ク私ヲ。或ハ太章政務ノ事ニ
ノミ君子ハ偏ヲ及ボシ小人ニモ亦或ハ名等
ノ為ニ或ハ姦計ナドノ為。能ク務ムル者モ有ル故
ニ君子ト小人トノ異ヲ於テ心ヲ労シテ仕
ヘ在トイヘドモ。君子ノ如ク分ケ子生内徒ノ如ク
ニ愚ノ異白ノ如ク分ケ子生内徒ノ如ク
ル者ヲ同テ孟子曰君子所以異於人者以其
存心也トイヘル此君子ト小人トノ分ケ心ノ如ク
ニ在トイヘドモ。君子ノ如ク分ケ子生内徒ノ如ク
ツヽトンヨ存在ヲ愛シ。仁ヲ一切ノ人ヲ愛シ禮ヲ
禮ハ一切ノ人ヲ大切ヨ思ヒ。仁ヲ一切ノ人ヲ愛シ禮ヲ
地ノ法ヲ天地ヲ一切ノ人ヲ大切ヨ愛ス。

親疎貴賤ノ差ヲ無ク美ヨシイキ偏頗ノ思ヒヲモ
ヲキ者也ヲテ古ノ聖人ヲ賢人ヲヲモ此仁
ト禮トヲ存シテ天神地祇ト合體スル者故
天下ノ人ヲ愛敬ヲヲロソカナラヌヤウニヒキヘンノ隔ヲキヲ。
天地トヲヲヲナジヤウニサレバヒトリ聖人賢人ノ地位
ヲヲヲシ上ケ。ヲロソカニセヌヤウニサレバ一切ノ人ヲ愛敬ヲヲロソカ
在ヲテ。ハヘ即聖人賢人ノ御ヨ佛ヲヲヲロソカ也磨
ク論ヲテモ萬物皆我ト同体ヲト云ヒ。而モ仏ノ方便
ノ説モ至人ノ明徳ヲ。ヲヲロソカヲモヲヲヲヲヲ人物ヨ
蒙ル事ナレヲ。吾輩ノ足ヨ踏ミヲク。天下ノ人ヲヲ。
膏肉父子ノ如ク仁愛

を施さんこと。
第三成人之美と云ふ者
之為なること。まことに孫さるまの如し。若
人の門弟子志ありて
助け導びくにて
る者をえんぺんと云ふ
ありて若事を為ことを
進めんとす或ら化ようと
おもしばそ人ようろう
之年生悪したるものを
を中るへんく両方と方便
さてべし。大凡人くの人情
なる人ら憎厭者也而ふ
い多しの多場ふ
若人ら彼み妨らる故
人ら十人一百人ら百人多くい
業る者ありて偶百人も勝
うのの人ら細謹
ついたて、成す若事も
長者と云者なり。希
ふもく人ら長者ら
意悪んぼくたうの

又ハ我に敵する者にても。むさぼる限棄て能く慈
て教へ導く者なり。かやうの人ハ万人の譏をうけ嫉とも
屑とせざる故に。但我が身の行を遂るのみなれバ。
一郷に在てハ一郷の人の悪心をひるがへさせ一国に在て
ハ一国の人の仁心を生ぜしめ福寿をうけさせしむなり。
第四 勧人為善 とハ。一切の人の心の底を尋てみん
ときハ善心のなき者ハ一人もなき者なりけれども
悪人とても世の中へ落入る赤子を助けざるものハ
なきにて知るべし。然れバ今日それ〴〵の家業を
奪れてだまく善事を寛くも耳に入らず耳へ入るとも
もふそ母ぎ心にそみても身に行ハずして一生

を荒く暮すもあり。たとひ人に事へて世を送るとても其の
もの。又妻子あれどもなんぞはたらく仁慈を行ふ者も。一旦
悪心の方へ靡くときハ。それをすてさせバ身を忽ち安きところに成
り。然るに不足の心も止みて又指南しての貧苦もさのミ
苦にならざれバ。結句ハうとましく。ぞろく身にても一般
りぬ。ゑいの外に繁昌させる者か。然れバ大愚痴
無智の者ハ此の平道をも安るゝのなきなれバ及て迷を
ゑさゑに思ひて一生あるうちへ出るまでかくしにて又人の世
にいる業に付て始めより貧賤なる者ハ貧賤に馴染
るが故に甚き悪るはなき者なり。但始ハ富も蘭も
せし者の中頃より衰微になりたる者。貧賤なる事にて

よくくらべ〇又ハ人と倆こゝろを悪びう狂我おそろしからぬ様ふるまひをしさるにても名聞の深計を企くわくをそなたくの儀をもて人よ雑言をとうけ。なくてさへんとし〳〵ハ今事ふ後しへ天道を怨こゝろ仏神を誹謗し〳〵紀頽明衣乃好きくまでを悪口し〳〵ハ善のくを妬嫉さるぐふ狂走者多〳〵ゆゑに惑たるくをでふふまを弱よりてゞ若道へ勧へをてゞめよ弱たるくを助わけなくるう如く恐きこゝろくを浮覚てるう如くふ發得さんでもこゝろ。韜退之曰一時勧人以口百勧るへ百年の後までも多くの利益あり。

世勧人以書とくるへ百世の利益

をいふくを勧るへ百のるくとぞんれたとへハ。

病のくりへ書抱をとうをてゞ仏ぐ頃いやくるへんをとべきこゝろ。然うたゞ小書抱をとうく仏ぐ教るへ賢小百世の利益せんとそるへハ法四人をとうえて縄をるふく直よ脈をとゞ茶を與へく。療治をと加らが如くにをふく教へどくんべなりくゝうくの生れつきなる者ハ多くの書抱をとうをてゞ其ゝ抱ぬふ後てゞ仏くこゝろを以面白くもゝ。おうくの教へ書をとうくふぐをべうもしべくゞの教へ書をとうをてゞ思をもて若よりとて思おの病若を救ふるをを捨ることなれ

へ非らざりけるて又我ら人の切るまくれたるべくいさめて先ざるのやうよろこんでうとゐるくらゐなり我身ようしうしうと是を我ダオ覚と徳義の景らのなるやうと知て誤り今ぐらいがうそやうもの五倫をかくしてよをはめたるやうの雑義或を不義とした不倫法して小屋始ふ通たる義或を非理よ横道をとりらうけられ無量ふさうべきやうて指のらんこうする時の雑義或を一時の

簡ちがいして御法度なとを犯しうする時の雑義等是等の類常くなりるやうの節よ我が身のこよ神よ崇るとしてぜんぐ十人参付ぬ者ぞれぐく若痛通迫をる者ぞやうの時節よ我が身のこよりて彼此大がいよ謀宮めて言を以慰諭それ式のるやうのなんとひるぐしそんの若を寃うもひべしそれ後く立夫を運しまて入まて救助べし崔子曰恵不在大赴人之急可也。

ふ者の言とこゝべし。まことに世間の人の中にこの人若
人ゝゝ逃ゝゝて或ら生じ付きたる世話やきこそ人
の急難を救ふと救ふ或ら人ふ思ら林ん指づめ擲ぶて雑
巻と救ふ或ろうけその業うでもそして好ろゝゝぬ人がら
の者ゝまの気ぜくうそんどこそのそして使りなれ人
をかくまし或ら刑罰ともふるのふるの
を治めて安んぜそなの外よ大いろる若根を
為し而も其身ろさのこの若るれ者ありうか
やうの人後ゝ或ら不ふこの金りけをし或ら為る
人ふれそられ或ら発明ろ好みを出ぶ命景人
そそをよかう安ふ来ふ逸ろ者多しのて

ろ若者ともあゝで仕合の好人ろ古来ろう人の怪疑
るなれ共かくれてろ若根のなろし敬とこそ其人の
付らばろ救ろべし。但人ハ此身の若ろうふの若ろを
救ふるの人の知ぬ大ふ若ろそ
ろ程ろ若ろ救ふるの人ふ救ふ者ろでと若しるもの。
ん此ろ仕るをそうそんど思くろハ倍この恩報を
ふることを知るべし。
第十一無建大利とハ大きく
ハ村里ふ救ふく其人の力想応ふ人ゝの為ひみ成る
ものをそろるのろで或ら人ある吐血まこれうの渠と掘。
或ら堤と築て供ろの体をとうし。或ら路橋を修理

まて往来の人〻ふ役りし。或ハ笑ひ化旅人ハ一銀を與へ又ハ宿を借ス或ハ茶まの水ふうふ我ものと出し。或ハ盃を與ふ或ハ皆の人〻ふ踊りハやうの事をなしてふ役りし。其人〻ふ及ハねる事ハ出ず。一人の力ふ及ハねる事ハ人〻ふ扶助ス。是非逐果べしやうの事をもとらくとをバ。ふるめし。人〻ふ指出すべくとうとんどいふくとも。逃者なり。真ハふおふもいるまじ。又我身の苦労を顧ず。但人〻ふそらこくとも。天道の御ふ仏ことをもて天道の御ふ入ことと思ひて。まく疑ひ怠るべからず。

七捨財作福とハ仏法の為行の中にも布施の

行を第一とせ而も此布施の二字ふつゝまりて一字ふ帰ともふ也。同て修行ふも施財ともいひたる如くふ仏門ふ入ふ為ふ。ふ法ふ為ふ。衆ふ為ふ。親ふ朋ふ為ふ。敵ふ為ふ。鳥ふ為ふ。畜ふ為ふ。但捨の心ふ著ふとらバ。ふ味ふ香ふ眼耳鼻舌身意の六つふ六根といひ色聲香味觸法の六つふ六塵とゝゝふ。人間一切の働ハ此六塵ふ根ふ六塵ふ接ふ。禅観のふの布施の行ふ云ハ此六塵の欲ふふ捨ふ我身の六根ふも空ふ捨つゝ。我ゞ抱ふ心ふ捨て為ふ。ふ仏法の為ふ衆ふ為ふ。ふ

のみにならず。今論ずる処の布施の中の施物のごときも、甚だ多くの人同らず。衣食ハ財なれバ財分人界ありて、大切なる者なれども大切と思ふ処を捨て施を設ける我身の慳貪の水を免さんが為なり。他の方にて貧苦を救ふ為の字の意ハ関へ投捨たる意なり。又陰の字ハ欠く勢めみく紀母なれバ欠く勢めて繋ぎて報応の味を知る紀ハ修行の人自然と進む者なり。○私曰、仏法の中の小乗の事なり。又万法万物を捨ると云ハ摧大乗の法門なり。実ハ乗の法門を捨るにあらず。

又、ろろるもあ〳〵ぐ。亦ら捨てく亦ハろら也。但向の慳悋の梵文を唱へく施をべし。自実大楽の意ハ合く。一紙ま後の小名も大名とみるべきろう。同く同く施をべし。○ろる意。陰の業をとるんして施をべし。○ろる時ハ全く生陰徳ろう。然ま八陽よ物を施ハ名事ハ成りぐるにや。名左よ水を捨の字よ二つの意ありて施したる物を惜むんをきくと捨とをろう。是を閻へ投入たるぐ物を施して人よ見ハ又閻ろうをもとに同じ

ゑり此甚放一なる物を再び用ふるる意
可故ゑり此云ふとて八切徳也一とつゝまへ
あゝ釈ども。真の経一の名ゝ八合ゞゝ一
同ゝ陰の辞をもるる云ゝて経をも拾と
云ゑり。扨甚ふ八随喜のんを起ゝ経をハ。
釈聖云ふ合ふ者ゑり。決ゝ陰徳の拾ゝ云
ハ。陰徳刈ち拾ゑり。無ふ陰徳の拾ハ左の
如くんふ一むまゝと思くとも。先んのお
さまゝさふハ思ひ。くふ姿さ也
ゆゞゝ又礼を言ハ。也ゝ陰一てもるれ
るゝ陰一てもるゑり此の大徳ともるけハ古

語ふ。天聞如雷天見如電とて神明の方ゝく
深くゑろゆふ放ゑり。中庸小莫見乎隠一云
つも同一んゝ陽徒と陰徒との不同ハ有れ
ども。捨の字のんを用る給き八同一ゑり。
貪女の一灯ハ陰一て仏書ゑれ非ざ
第八護持正法一と八儒佛の教を束て正法と
云ひる者也。此正法ゝ徳を積ゝ天下を治
め。吾を勧悪を懲し二世の悪報を成敗を
るゑれハくて眼目の如くなる者
なれハ。むゑ敬を盡とゞゝ甚ふ神社仏
閣ゑり細くの木像経典の類ふゑゝゆでる

り若破壊ふ及ぐ宮く修理を加へ盛光倍增を利ろべし。経文ふ一つの譬あり。藁をおんと思ふく痴を彩ふべし。藁を得ろのくなるを采ましてをはるぞとう。仏教ハ後世の法なれば現世の業をはるの事ふ仏教を修行されハ現世をはるぞと云譬のん也。是をハ世間の中ふハ仏法傍の三つを三寶として三つのたくらとうそう。此三つを大切ふさるを別して護持平法とふふ。

第九敬重尊長

こゝ國そてハ主君家ふそてハ父兄を始とう。依て人道徳のそき人学識の深きる人を八皆く敬ふ。年老ける人を八皆く敬ふ。中ふも家ふ有そて父母ふ事ろ者八年生ふ兄我ん雖ども。さて身をんふもおかしみても父母のんよさくぬやうふんぐべし。又年老てへさびしわりのふしハ尚く例を離さぬやうにそべし。假ども窮屈なろるぞと思ふうそうざれバ癖ふなりて窮屈ふろる者なろ交ぶちのやうれ思ふくハ又癖ふ於て

窮居ふさぎこもりて父母の喜ぬよび嬉
く樂こふる者を。考
成」性こそ自然しく柔和吾ひの人物と成也
柔和吾ひの人ハ一切の吾神を大ふ立傷く
守護そこ〳〵の者ふ君ふ事る乃ちま
さ成なきども今日の當務ハうげひなくこる
を第一とそべきそう。古人の言ふ幸君如天
とこう。君の見つぱつ
通ハ見徹なう。よハ君よを敬下ハ百姓を恤。
爲政刑賞ふ私なきハ天よ天よ
古らうた者の永の繁昌をるる事時の

日系をえても知るべし
第十愛惜物命
戒る八別而悪ろう。善悪八仁なり此仁と云者
八別人のんなう。鬼神のんなりくて天乃
んこう。凡人を始として畜類虫けらふるる
まて此天のんたる仁を分て吾に
物の實の内の柔ろる根幹の
の末の生くさる根幹の命となる者故仁と名
付たる者なう。桃仁杏仁
身の内ふるふるべ生氣の
の名を不仁とそも。其

とて之を免れなり。此れ仁乃ち物の命なるを知るべきなり。是をもつて孟子も惻隠の心なきを人非とするなり。惻隠とは仁乃ち人なるを仁乃ち人の心なるをいふ。仁を敎を天のごとし豈戒慎せざるべけんや。且天地乃ち人を方ふかるふは非ざるなり。故よく人の先ふ後ふを洋々たる者なり。是をもつて顔子仁を問へを孔子答て曰非禮勿視非禮勿聽非禮勿言非禮勿動と是仁ハ天地乃ち神乃ち人を接

待そるハ聖域のうちなる故。顔子ふ答へ曰よし此の仁を此の如くうる者なり。中庸ふ戒慎其所不睹恐懼其所不聞と云へるも仁の尊爵也人の安宅と云へるも仁の居ふて聖学のふ順ふべしと云へるも仁の居ふて天下の広居と云へるも仁の徳と積と之ハ皆此の仁を求るうち孟子又曰君子之於禽獣也見其生不忍見其死聞其聲不忍食其肉是以君子遠庖厨也と云ふ此意ふ洋々たる雞犬の類を恵して禽獣と云なり。磨古ふ。ハ是等を之の含物ともるうち。然る ふ君子なる人ふ此牛羊を見のおふて殺て料理は

又ある目にハ見ざれども。殺されて苦む聲を聞
てハ其肉喉に下らぬと云。君子たる人の
庖厨ハ遠き方に建るとあり。又古へに四不食の戒
といふ事を務めたる人あり。一ハ殺をみるとき
見てハ食ハず。二にハ殺を聞くハ食ハず。三にハ我
家に畜たる魚鳥の類を食ハず。四にハ我に饗
故にわざく殺したるハ食ハずとなり。此等の古
賢に習ふて殺生を戒べし。人く饑に肉を嗜る
ハ殺されたれバ先づ四足二足をたち次に鯉鰻
蛤卵等の生ながら殺して食ふものをとゞめ後
にハ無塩物をたつやうにせバ善悪へんさくむ

に従く。一向にたちても苦にならざる者也。ごく
又是のミならず螻蟻蚊虻蚤虱にいたるまで皆
天地中の霊物也。妄に残害をなすべからず。蒼蠅の水
に溺るを救ふて高第に登り。麑の子を助て
宰相の官に昇り。雀を助て三公に至り。亀を救
て大名に成りしくもあり。善行ハ限りなし
普く此十條に倍く大害を述るなり。條を試
に準じて廣く善事を行ふべき者なり。
訳者按る二。問て云く仏教の中にハ殺生を大悪
とし。諸の戒の最初に居れり。翁然るべし周孔
等の聖人ハ何ぞ此を戒めざるや。答て曰

周孔ハ佛ニ非る故ニ戒めハざるなり。殺生
戒を儒者の戒とハ非ざる故なり。問て云
く若人儒者ならバ殺生しても苦しからに
るにや。答て云く衆生の業食ハ本より
分れしかれども但人たるに在てハ是非を察
れバ祭祀に用るまで貴賤の節制ありて殺
生をも許さるなり。然りとて悉ニ殺しても苦し
からざるものといふハ古典の中に未見あたらざる
なり。論孟禮記等の中に天子無故不殺牛諸
侯無故不殺羊大夫無故不殺犬豕といひ或ハ
狗を以捕ても網を以捕べからしと或ハ淵川の魚を

捕るにも檻をせしめてなるぞかしにけるべかるに
或ハ鳥を射にも寝たる鳥を射べからずと。或ハ子を
姙る時畜ハ捕べからずと。或ハ殺さるとなるく
る肉ハ。又ハ殺さる時苦声を聞たる肉ハ食ふに不忍
など見えたる言へる事を見れバ生ハ全く殺生をも苦し
からざる者としゆるすにハ非ざるべきとみえて。聖人の
出世にハ麒麟鳳凰出ると云へり。此二物ハともに
仁獣仁鳥なる故に。聖人の仁徳と同類相感じ
て出るとみえたり。然るに鳳凰ハ生物をも食はず
但竹の実を食として。麒麟ハ生物をも食ざる
のミならず生草のうへをさへも踏ざるよし也

此生仁獣も殺生せざるを
以てれバ仁人も亦殺生を好このみさる理ら
とを存ぞるべう答云く聖人実ま殺生を好
そのみざ八仏ぞ一向ま戒めや善て曰く知
らざ但し一物を殺八天人を殺す列
我を殺也故ま聖道を修行をる者八きるのうそれども天下の人くよ聖道を学よ
人へをてお〻然る時八とそも制し遠られ処物
る有ま止るのをはざして法律を違ら也ま
者ともんたる者ろ菩薩の霊王國を失つ
て申士ざ家ま入く権りて死を申夾奉霊王

ま大殺害る故ま己ぐ二人の女子を殺して霊王
の酬をうを受て殺らの先傳ま出つ是駒薩八不仁
のうのえとを云へ共又是を殺をるの後をとつくを
ろう。此答也万の理を
殺生の罪を奪なう親の敵として人を殺もも。
者そといく殺生の罪を奪べきしや。先王の天地、
宗廟そまるま牛羊を用るも誠を盡ま殺。
申夾ぐ霊を推て祭ま。右の外八
或八貧客の會宴或八羽毛皮角をとて一切
の器械小造るまろう。此等皆人の織人を
使役ふること同じ理ふして在上の人の天

下品を以て治るの法制なり。周礼善く考へ記せり。審なり。庶人の妄に霊龜小虫の類を食ひ、腐敗牛肉の菜を用ふるも、魃蟲を喰ふの類の羹湯を用ふるも、それ眾と奪爭もすべきなり。七十以非肉不飽と云へばすべて飽とこゝろえたるもの犬は在家の犬ぞうも出家の中にも奥屋所の犬は短命なり。市中村家にも長命多きがごとくそうべきそうもなし。是皆の五種と云ふ仏法にて食ひ悪趣の儔道にそへたる仏令なり。今是等の音根を行ふとする者の物の食ひ方を改過私曰と来い都く事の法制を立つれば此の篇ごとく学者のあやまりを進てん術のよふ旅て教暁者也

そつ人となる者は若を為せいう者軟なりと云ふ悪をせば悪報あるべきなり。春秋左傳并國語の中にて甚人の吉凶禍福をこひわてたるの甚多し人の吉凶はそつ人中にて顕るゝ者なり。若人は此をを知らざる故ふ或ら

べからや。若後生報應の法を用ひざるつを用ひて可く若今日ふ当て物を殺してる天譴あり。幸教しく今べきそうづの者と云ふ小陰のんなく人と云つべ悲いかな

銘雖不過或亦死之而
不可辭也
○孟子曰大人過或亦死之而不可辭也偶然
而有之非故為之也
○孟子曰大人者言不必信行不必果惟義所在
大人者言不必信行不必果惟義所在
○孟子曰大人者不失其赤子之心者也
大人者不失其赤子之心者也
○孟子曰大人之事備矣
大人之事備矣
○孟子曰君子所過者化所存者神上下與天地
同流豈曰小補之哉
君子所過者化所存者神上下與天地同流豈曰小補之哉
○孟子曰堯舜性之湯武身之五霸假之久而不
反烏知其不出於仁義也
堯舜性之湯武身之五霸假之久而不反烏知其不出於仁義也
○孟子曰仁人之言其利溥
仁人之言其利溥
○孟子曰君子深造之以道欲其自得之也自得
之則居之安居之安則資之深資之深則取之
左右逢其原故君子欲其自得之也
○孟子曰博學而詳說之將以反說約也
博學而詳說之將以反說約也
○孟子曰天下有道以道殉身天下無道以身殉
道未聞以道殉乎人者也
天下有道以道殉身天下無道以身殉道未聞以道殉乎人者也
○孟子曰柳下惠不羞汙君不辭小官進不隱賢
必以其道遺佚而不怨厄窮而不憫與鄉人處
由由然不忍去也
柳下惠不羞汙君不辭小官進不隱賢必以其道遺佚而不怨厄窮而不憫與鄉人處由由然不忍去也
○孟子曰伯夷隘與不恭柳下惠不恭不羞汙君
不辭小官進不隱賢必以其道遺佚而不怨厄
窮而不憫與鄉人處由由然不忍去也爾為爾
我為我雖袒裼裸裎於我側爾焉能浼我故聞
伯夷之風者頑夫廉懦夫有立志聞柳下惠之
風者薄夫敦鄙夫寬
伯夷隘與不恭柳下惠不恭不羞汙君不辭小官進不隱賢必以其道遺佚而不怨厄窮而不憫與鄉人處由由然不忍去也爾為爾我為我雖袒裼裸裎於我側爾焉能浼我故聞伯夷之風者頑夫廉懦夫有立志聞柳下惠之風者薄夫敦鄙夫寬

○孟子曰伯夷非其君不事非其友不友不立於
惡人之朝不與惡人言立於惡人之朝與惡人
言如以朝衣朝冠坐於塗炭也推惡惡之心思
與鄉人立其冠正其纓端而望之若將浼焉鄉
人雖由袒裼裸裎於我側爾焉能浼我
伯夷非其君不事非其友不友不立於惡人之朝不與惡人言立於惡人之朝與惡人言如以朝衣朝冠坐於塗炭也推惡惡之心思與鄉人立其冠正其纓端而望之若將浼焉鄉人雖由袒裼裸裎於我側爾焉能浼我
○孟子曰可以取可以無取取傷廉可以與可以
無與與傷惠可以死可以無死死傷勇
可以取可以無取取傷廉可以與可以無與與傷惠可以死可以無死死傷勇
○孟子曰恥之於人大矣為機變之巧者無所用
恥焉不恥不若人何若人有
恥之於人大矣為機變之巧者無所用恥焉不恥不若人何若人有
○孟子曰恥之於人大矣為富不仁矣為仁不必
以富恥惡其本也
恥之於人大矣為富不仁矣為仁不必以富恥惡其本也
○孟子曰人皆有所不忍達之於其所忍仁也人
皆有所不為達之於其所為義也人能充無穿
窬之心而義不可勝用也人能充無受爾汝之
實無所往而不為義也士未可以言而言是以
言餂之也可以言而不言是以不言餂之也是
皆穿窬之類也
人皆有所不忍達之於其所忍仁也人皆有所不為達之於其所為義也人能充無穿窬之心而義不可勝用也人能充無受爾汝之實無所往而不為義也士未可以言而言是以言餂之也可以言而不言是以不言餂之也是皆穿窬之類也
○孟子曰人之所以異於禽獸者幾希庶民去之
君子存之舜明於庶物察於人倫由仁義行非
行仁義也
人之所以異於禽獸者幾希庶民去之君子存之舜明於庶物察於人倫由仁義行非行仁義也
○孟子曰禹惡旨酒而好善言湯執中立賢無方
文王視民如傷望道而未之見武王不泄邇不
忘遠周公思兼三王以施四事而有不合者仰
而思之夜以繼日幸而得之坐以待旦
禹惡旨酒而好善言湯執中立賢無方文王視民如傷望道而未之見武王不泄邇不忘遠周公思兼三王以施四事而有不合者仰而思之夜以繼日幸而得之坐以待旦

をなすべし生ハ畜生そうとそうそうぴ孟子の一
語ハ過を改むるの名称の撰そう。撰とハアア
のくろくのようなるをそうとハ彡へ歩るなの如
めそう過を改んとするをいぴ語を名称ふりら
めて先ハ恥の一字をふくぶきこうそう。
第二要發畏心とハ畏の字をそうとうむ和漢
そへきこころろくなそろーとこれどのるそう。
用ん悪途を畏途と云てそ知ぶこれぐらいの
下へ比そう。消よりハ天そう。家を其ハ間ふ者
ふ行住坐卧せろ天神地祇をみの罪神と
てをぶふ居ふ方ろ非を考ふ家毎と同居

の一者そう。此をそうとそうそうぴ畏意ぶ一うれて
恥の一字を失ハちまび吐う
そうぬやうなる陰悪ハ自然と止をきなそう。又
公ノ日利欲の為名聞の為ふ謀計を運ー詔を
かすへてん人を欺んとをるりの或ハ陰悪ぶそう
ものぶ多くハ人を知るまだーとんぱ。然そハふ
つろと言隠ものそう。されば大学ふ如く視其肺
肝と省く胸中をそうとそうぬ裁割こんぐらぶ如くこんそう者
こそれな。つそど言くろめ言かぐうてそ不値一
文とそう。ハ鄙諺ふ一文ともなそうぬとこと
同ー緯そう又論語ふ朝聞道夕死可矣とこ云

つゐに悪心八十生悪を造りしくへの終臨て悔及て
一生の非を矯直して死るせかうとつゝ。
志専一つれば悪を改めて善とうとゝへ。譬べ
千人の圖室ホ一トたび大をとゝせへ忽千年の闇
を滅ともろ如くうつくしめ十六十よも及べだ
たとい吾行の教を冥くも。老てのそ同なう
つゞこゝてんの稱うぬる者うつ。哀むべきうつう
過を改ることゝへ老ホ泯らざ。一日ても改む
きへを猶をそ孫ホ他くく。其ホ身も長くみつう
くくとゝる倫理の教のゑうゝ仏門の教ホ
てゝへ老ホ不実うつ若一旦不ゑホ薫ホ名

ホ錄うへ一生へはもむくべきの所ホ永劫の獄苦恐ら
筭三要發勇心とゝ。豈油斷さべからるうんや
を起乃ちのと云ゆくの過を改むるホ吝う
ゝ怯弱神ホんを奮つくび故うつ。若行の去
の字中に衣を脱で海川ホ飛へび如くゝ毒蛇
ホ指を噛くる者の。其行其指を切て捨るが如
くの念を起さゝくゝ。天命の釋るも捨ホ決定せ
ば行の罪うホ滅と云へう。従来悪つを為せ
我身へ吹日死るび如く過を改なる此身を今日
生れ〳〵るび如く観念して。真實心うう大勇

を伝えんと。此を以易の風雷益の教えの如く右此三件の教を務め約束は勿論の過ありとも其の氷の日永遇が如くなるべし。時て又過を改むる事て事のごとく改むること。恰も二重の衣服あり。第一ふ事のごとく改むること。恭日教生せざる者の今日改めて教生せざるが如きごとく今日改めて怒ざるが如きごとき事のごとく改めて改むることなかれ。第二ふ理をこそ改むることなかれ。時て其理をこそ改むることなかれ。天地ハ好生悪殺のごとく

然るふ天地のきびしき教生をそむきて天地の教生を敵に対をべきや。又万物の生類至微の小虫を彼此を殺して気を養生をかくるの事。而るを魚肉の腊も一飽ふ止る。蔬菜の腊も一飽ふ止る。何ぞ彼此生命を害して我が生来おの腹を肥るの理なんや。又人と他の生類と形ハ異なりとも人法ハ皆一体なり。然るを同士伐して生生ずくの他を結ふ恩癌のごとく非ずやさて又怒を戒るの方法をそむきて怒る。福ふ因て怒る。是非の儀ふ及ざ甚多

我ハ狂ホシテ彼ハ至狂ラ故ホ紀ララ。而ラホ矣
狂モ之ホラ乃者ハ先ツ己ヲ知テ利ララホ
ナラヌ者ラ其ヲ以テ及ツク不便ナラルヲホ己ヲ死也
たらく児童ト角力ヲ爲ルテホ云ホ頁ララ先
彼ノ之ヒラル如クララ。天下
無自是之豪傑ホ無ク人之學問ヲツラヲ。
此ホ云ホ元ホ人ハ人ヲ甚ク偏屋ラル者故ニたらく
吾ラ子等ハ非ララトホ知テモ改メヘ人ホ咎ルヲハ
ララヌ者ラヲ。況ヤ是ナル己ヲ正ス乎ヲ万人
必ラル故改ルヲホララ。己ヲ正シテ爭怨ララ。己ヲ万人
ホ捨ラル豪傑ノ人ラ胷中寛大ホシテ大海ノ

如クナル故ニ右ホ左ホ後ホ前ホ水ノ至ルナヨ
隨ツク自在ホシテ滞ルヲホ無シ。而ラモ
ホヒラヲノラ出ララ。ララ人ヲ教ホラル故
ラノラヲ又右ノ人ヲ教ホラル故ニ
前モ後ロ共ニ礼モツ。礼ハ妄ホ人ヲ恨怒者
ララ。ラホ同ラテラル人ラ楊ラナヒヲ射ラル如ク
ナラヒホ射ララル時ハ己ヲ未ノ至ラホ故ニ
久ララク射カラナラル人ヲ恨怒ラルヲホラ者
ナラ。ラホ同ホ己ヲ修メク徳ヲ積者ナレヒ
若不如意ララルヲ者ハ我ガ傍ノ落ホ故ナラ。ラヒ天ヲ

怒るんこゝきくをゝ学問もてる人ゝてよう然
もゞ後もてる人ゝ学問もてる人ゝをゞゝ
ゝ人ゝ対ゝて是非を争ひ。目を嗔ー脅を
攘て怒るゝハ必有るまゞ仁乃理ゝ非ざや畢
竟非ゝ手加らゝゝ我徳の為故ゝと思ゝ
べゝゝ種ゝの徘徊の者ゝ有ゞ豈過失ゝらゝ
我等幸ゝ凡庸の者ゝ有ゞ豈過失ゝらゝ
んや徘徊せゝゝくハ直ゝ異見教誡ゝ従ゝ
拠受ゝべきゝ通理なり。何ゝ汲ゝべきこと
の有ゝんやゝゝくの如くんの備をゝるゝとも
換言傍語猛火の如くまゝ虚空を焚ゞ如く

ゝゝくー。雷てんゝ止ゝ
の過悪有ゝ生ゝ学ゝ
ゞゝゝ過ちゝ自然
第三種心而改ゝゝ
理をゝゝて改ゝ
き理ゝ止ゝゝ
一切の悪行ゝ
を動ゝゝゞゝ
らんや。ゝゝ一條ゝ
るなゝゞゝ毒樹
枝くゝゝ

右の外修
ゝ唯ゞて通理をゝゝ
改ゞきゝ。
上来のゝのゝみ於ゝ改め。
ゝ或ゝ欠欲悪きゝのあー
れをゝゝてゝゝゝ而ゝゝ
ゝゝ。我此一人の原
発ゝゝ。ゝゝの悪ゝの仍ゝゝゝ発
法悪の根柢たるんゝを改
伐ゝハ其根をゝゝ
ゝ及ゞゞて枯ゝ如く

うつゝの夢のごく日天来よ出ゝ神ゝ靖乃至暮
那神ゝごぐく伏隠ろ如くなろ。曰く思くい
發ゝもまゝよ。發ゝもまゝよ。但一くよ吾事
若ゝゝ志一。心念相續ゝし同ゝ斗ゝごぐ那
念ゝ改ゝゝ行ごゝ一て自然よ止むべきなろ。但一
是ゝ言ゝ根のくの紛ひろ不の真傳ゝ若一
山真傳ゝ堪ざろくゝ事のゝゝ改むべ一
ゝゝ若一山ゝ傳修紛のくゝ旬力のゝゝてい
深ゝ滅一難一と知りてゝくい雜ゝ除ひ
能き交ゝ支ゝ。遠くい仏天ゝ拳ゝ孔ゝ記一一心
用機ゝ種ゝ一て。至ゝ秘ゝ意ごゞ識悔存ゝゝと

へ一或ゝ一七日二七日或ゝ一月二月ふるごと
ハ必ごゝ山當身ゝ於くゝ靈驗ゝ於ゝるまろ。甚靈
驗の二ゝゝ於ゝ。或ゝ心神悟曉ゝそくゝ何
の滯ろ事なくゞひろくゝなろ。又世間ゝ資求ろ
不ゝゝゝれゞん中ゝも動ゝゝるゝき
なろ。或ゝ智恵ゝゝ冥くゝて若ゝゝ世間の通
理。ろハ如ゝの道理。若ハ書物ゝ諸乃義理ゝごく從
ゝ冥ゝ實ゝ居ゝる者の忽四方のゝ靖ゝゝ亮き
ろ如く。ゝろれろゝ或ゝ遲死晉而觸
念皆通ゝゝゝなろ。或ゝ事繁ゝの場不ゝ有て思
業ふけゝゝて刹那ゝろゝ悉甚ゝ今ゝ之

あるいは遇冤讐而面謝作喜或は我が入れ
招有て供する者有るを見ていよいよをして和融
吐物を棄るを見ては或は神人異人の教を受て善
を勸め或は虛空より飛行もろもろ或は
佛堂神殿の莊嚴の通具を善うるもの
皆ら是皆眾障過惡乃清滅せ一數強なる者え。
此の如く數をはらくも。我是等ハ漸く
の設なり。深くの數へ窮なきものなれば時自
滿自得の意を起して家路
進もべし。昔唐士の徭と云國ヘ遠伯玉と云

賢人ありき。孔子もあやまれるとの人今
廿人二十歳の時十九歳までの過を改めて
無ふ九一年ふるまでの過を改めたる
見くらべて非なりと知くえを是を改めたる
そ又去年乃非を改めて今年
の非を改む。此の如く年くに次第くよ改めて八十歳
ふるまく我四十九年の非を知ると云ふ。
遠伯玉の如き賢人なれ
改め要されぬ者くの人
九流の者ハ過惡日くに積
なれで是も非もそらげるし。但ふらうき

のこれ非そぞろ悪ろ事ハ必ずせうれんろも忌
口ろも言てうろくとお暮をハ儀もうれるれる
べしこれバ大の如く善の方ハ霊験ありまハ又悪の
方ろも效有ろるなう。甚ハ有増そいハ人の過悪
深重ろる者ハ或ハ心神昏塞轉頭即忘ことへぞん
次第ふ老耄もろる事ろ多ろて我ら朝ふ算たろるも
夕べふハ忘ふ右ふ出ん事ろ思ひしるものもたろうて
中くになる者ろう。或ハ無事而常煩悩ことへ仏
ろるものもさ時ハ仕むろくろ事ろ思ひこ或ハ悪げろるものを
怨ろ或ハ悪ろ事ろ思ふ事ろ怒ろ或ハ悲むまろろるものを
そろてれいおめ或ハ之結ふなろねことを之結ふ

して心神を悩乱そろろ事ろなろう或ろ見君子而蝦
然消阻ことへ道の正しれ人ふ出會てへ自然ことそろ
そづろくろ子生の務ぬまて早くこ之ことを
るろを欲そろことなろう。或ろ聞正論而不樂ことん
庸大和乃善をろくこ心しれ物絡ろるごすることを
算ろくへ算れさそろるのこるれべ他見そして
苦しむことなろう。或ろ施恵人而反怨ことへぞまく
人ふ慈恵のこるなど施せバ反て恩そ忘みく
報そろるやうれせろうくこ或へ夜夢顛倒甚
妄言失志ことへぞなどこんろ之ことろ反て出るこ之ことなろう。或へ之ろくの霊之

そこくも我が身獨よの方ふひろく人ホ
も言うに語う耳せ志よもその狂しくなること也
足皆積悪の験なる者なうぷろく大事のこすら
人ふ思へ知うんくんこんこんなをこれ
改むべし猶豫をるるものそ
訟云ひ第三條ちと根の人の過をそる系みて
幸修ふ於く別ふ臓悔乃儀法有うぷ在承下根
のくの一條行ーいるるものふ非ぞぷ孔先生一家村書
を蓄ーて天下の人ふ名を勧んこそるいと中
下三根の人を浅とくきふ非と黍き臓法の別
深よもづて大概を知るもるなるよ秘んけ人

ひ一條の及び邪きそこうんく全篇の主意を於ら
るの主旨且人うく員きそかへて幼人の為此
一条ふ准んじて一つの男行をえらぐだの如く
引くれ要会起る時ぷしも強く制止せと真会
乃當下をろくくおくへて彼のよふ生をを秘文をと
唱ふろーぷ是言上のふ心ふ悪ふろりのこ黍ーくひ
ふ要べきよめーぞ
さてくひ改過の篇の初めふ人の威儀言動を
えて古ふをおるるの左傳國語をんぷ見しこいう。
左傳國語をんぷるるの論也来ぐんぱるんぷ人ふ甚んめれなくぱくべーぷ今

二書の内ゝそのく異なるとゝび○臧孫達
諫糴公周の内史冩て減孫達が魯国ふ在て子
孫長久かるべきを知るとかひくく知るの○
瑕擧足高爾伯比見て屋服が放軍して終ふ
縊をとくゝ孔せゝるをとう○宋乃公
子御說と云人魯国ふ使ふ對ふるの縊を減
孫達冩て御說が宋の君となるべきをとかひ
くて知るの○周の王子頽宴樂失時鄭伯
冩て王子ゝ頼ふ佐をはさゝしるをとゝ行くく知る
るの○鄭厲公六代の樂を備原伯冩て甚年の
久月厲公卒をとう行て知るの○邾子

と魯公と勤王高下わろ貢見て二君共ふ死亡久
しくかゝりてをとう行くく知るの○楚の子越椒
執擊傲叔仲惠伯見くく宣が四年越椒が一族盡く滅
されしをとう○宋公ゝ叔孫ゝ宴し
て相哭と樂祁ゝんくぴ年の冬二人共ふ死せるを
○○て知るの○鄭伯掖王過両搤同士貢伯ゝく。
鄭伯のくゝしてをとう○成肅公受服不敢なくゝ
云如ゝそ死せんるをとう行くく知るの○周の景王
無射を鑄る冷州鳩景王のゝ疾をゝ崩ぜんるの
をとう行くく知るの○齊の高厚太子光と掴くく諸

候ふ會して不敬なり。士莊子ふたり後二人ともに
殺されしものそうろう。○魯の叔輒日食ふ
哭こと。昭子再て甚年八月叔輒ら死せりそうろう
て知らるる。○鄭屢宋を侵して競孟獻子寫く勉
政の三ち夫盜ふ殺されしものそうろう。○衛
の石共子死と甚子悼子哀ともに孔成子寫く悼
子ふ出奔せしものそうろう。○齊侯と衛侯
と會を二候俱ふ不敬のもの有り叙向見て齊候
ハ襄ぐ廿ふ年衛侯ハ十一年同く我せらるるもの
そうろう。○知立ハ年程鄭ら乱せりそうろう。○知
階を問然明再て聖年程鄭公孫揮ふ會して降

る。○晉の輔宣子聘周辭を失せざ大子再て宣
子ら子孫の栄へんこそうろう。○鄭乃
子展伯有子西子産子大叔仰段公孫段以上七人
詩経の中の詩を以くふ答ひ。晉の趙孟寫て一
一ふ其人くの体答を知く。論定せりる。已上二十條
へ有ほーなり。盡くふ此ものハ頻ハーなれバ畧して

決科要語

揚貞復先生撰

休寧と云処ふ洪甲先生と云人有り。其門人ふ程学
聖と云人有り。聰明ふして操正直
なる人有り。中年ふ後ふ身ハ人間ふ有りながら神
を冥中ふ往来せしめたる人有り。遂ふ冥中ふて雷

部朋友として雷方の復人となれるぷのうれ異人
る故ふ人の吾心生死をと云ふ微塵もなぐつのう。
夜の雨雷雨のつ光ふ雷の為べきふく安ぐお方
ふ師匠洪甲先生へ告げ知らせたうぷ始ふ他人
へ雷て知る者なう。但洪甲のく知そう或附洪甲我
身の一生涯のつをと同じくれで学ぶ聖同く先生今迄
へ後ろ為ー但ー冥中に於て基ぐ先生を重ん
ぞる也固く先生を心閣君の師とせんつをと云
と云へう。洪甲同て一笑して同くとても今世の身分
へ契後なう。今まも冥中に徙く閣君の師となる
へ本快活のつれ非をやとへへう。然る処其日の暮

方ふ及んで洪甲俄ふ打倒まて正氣を失へうぷの
ろふ永門の人庭上をうくあうして支人のやう
者あ六人をを入て居々るう暫くありて之を退
をまう洪甲も往なく養まう其翌朝早くふ
学の聖来く洪甲に云やうへ先生昨晩ハ何のつも
りしや唖然たるひしるの有ん哉晩先生の閣君
の師とつくへ快活のつれ言へ冥中に於て
なるう故ふ刈使者を下りて先生を迎へしなう然れ
共拙ふ先生の戯ふひしるのを知る。其ふ余
訪者をきそとやのべくお止やふ我しとてま
ふ冷笑して止そうき。

さて冥中のるゐ学を聖う洪甲に告げ知らるゝ多々なれどもそれ。洪甲うゐて人よ傳ふること。但潘雪松と祝石林と二人ハ許して語るゆゑ。然こて氏二人洪甲と交るうゑ及ばの。ことおそれ。ならくるれた何るうゑや及ばの。ことおそれ。

此をふ伝く洪甲学を聖ふ雪松と石林とう生ぜのるゐと言ひなれバ学を聖ふ同く此一事ハ我まづ幾分ふ洪ざれハ劣らを但し一求考るゆも雑きくゆふハ洪ぞとえひきが。二日過ぐ来て洪甲に告て曰く。

雪松ハ萬暦十一年癸未の年の榜ふ姓名うく。

なら。石林ふもまづ榜ふとくとゝいくら。

癸未の年雪松ふ及ばせう。洪甲又石林が及ばの。ず第ふと考んるゆと獨学を聖曰くなるゐど承知仕ひ。元真の榜ハお年の十月ふ定う。秋の榜ふ其年の正月ふ定まるなう。且榜の定るを待ち多く其学なくてでふとゝいくう。洪甲算てん中に畜又其年ふう三年過て万暦十二年甲申の冬十月ふ至て又学を聖ふ向学を聖對て曰く頃二つの天榜うれうよへるハ萬暦十四丙戌の榜なう。下公の姓名あう。然己丑の榜なう。氏己丑の榜ふ石林ふもまた上下の二榜の姓名其ゐ初ふもうれバ或ふ上が下となう。下が上となう。

又姓名の救多くなるうおくくみうて決定せそうる
るみうとくくう洪甲其敬を殺ふ当日く冥
中のる陽なるに於くて人間の罪福を盡分をうふと。
て冥中に於くて人間の罪福を盡分をうふと。
基微細るうる許部う月旦評のおきるみそ
非ぶて。平生之善事んとを為人くても。不圖一会悪ん
生をれて神乃其織をふくむ。又平生不善を
為人くても。痛悔改心を八神又其罄香
を觀喜を形と彩と声と響との如くなる者
なう。さて亦先生もはなのをう天ふ文章と司
どる星ふ文昌星と云ふ及等の一事八專此

の文昌星の府ふ屬とるる八時ふ府の牲面ふ載なうぷくくふ文昌府中
ふ有く人間文人の派福を微善ある微悪を處置とる格式を見
るふ其本人のふの微悪ハ及ぶ。高祖父曽祖父祖父父微善微
悪ハ及ぶ。其本人出世の時ふ計校ふうるの
なう此ふ依く祖先の徳の積をるハ其人不
善なれ共出世とるるの有う。又祖先不徳なれ
善人なれ共落等とるるの有う。又其人身ふ々検
束なれ共人中に於く固く正直をもう。悪毒の
意ふ死りのとるう挙らくなう。又其人身持

ら怯むやうなれども。かゝる中ゟ詠うる人ら棄ら
くなうゞ己ゟ天榜ゟ名を載られてる人の忽ち
名を削らるゝゟの有ハゞ中ゟ更ゟ会を生ずる
ゟ故ろうゞ其人本名のまゝ記不名人ゝても。
忽載らるゝハ人中ゟ会ゟ改むらゞ故ろう。冥中の
成歟ハ其人の身ゟ為ゟ如ゟ。今天
ゟと称りて平生幣ゟ棄ゟ玉ゟハなゝ。今天
榜二処ゟかゝうて二榜の姓名ゟ下榜減不定也。
此ゟ同ゝ石林ゟの榜ハ己丑の年なれ共及等ゟ
更のゟハ其ゟゟゟちまゝハゞ今ろう、計ゟゞ
くなるとゝのう然ろゟ石林本不名人ゟ非ゞる
ゟ

ゟ故ゝや。果して己丑乃
年及ゟ年ゟ而も此年ゟ利者ハ楊貞復先生ゟ
なろう。雪払ゟ予と同ゟ馬開之として有ゝしなろう。
元例ゟ処ゟゝる如く。謝諾ゟ息者ゟ如くろうゟ
ろう。前者ゟ友ゟ東部郎と云なろう。さて予丁丑
石林ゟ方へ訪いなるゟ。右ゟ物語ハ備ゟ石林ろう
承かるなろう。予此物語ゟ写て大いゟ感数しろう
思ひ合ろゟ有ろう。予幼かの時ろう父ゟ従ろく暮
ゟ学問せろう。ゟゟ俗歌ゟお衣ハ衣徹ゟ下足ゟ
て若文字章句ゟ有ゟ

なごみまさバ其なびごふ父ふ望として喜バ
めうれう悲まを仕憾るゐを予う母く甚多の病
ふ朽へしそうぃふ困てを為人の疾をづまるとを行
て大路へ出て矛道ふ向く行撃てとうけなく其を
も我をふるひとそ早く及第立身して父母くるに
息宗延令ふして長く家門の繁昌をえせしめた
まえとにまる喝へんまる為てれ行ぱ時言ふ
へ急ぎ我但父母のまのこ思よく他事ふ労りくる。
在郷学まて八二十一歳のは己ふ撰人の救ふ全ろ。
甚後都の試場ふて八度くも出てれ甚度ごと
ふ落第して空しくてのこ永ふ還まろゐふ還

るだとふ父母のん中をを祭やう骨をひしぐ花
ふ悲しかうれ里ふ於ろく又大雪猛のんを犯し
仏おふ向く朝夕黙祷して不孝と過る事能ハざ。今ようを
ひ大友大孫をいる共志を道徳ふ潜毛頭も富
貴ふ泥べうべ官政ふ在くへ民を安だろうを
専としてかうそめふ菓ぐ身分の私をなざ
をうしてさく。總じてハ人へ我ぐ君ふ忠をを尽し。
下へ我がハ父母ふ孝んをを残とべ。ばん若敢つめあ
らべ神明忽ち罰しもくとと誓をりくばをうと立
てく三年過く及第し吏部郎の官ふまて升

まるなう等正覚の冥中のうを出法せ〳〵つく
をうく素どろぶん中のう吾恵ふ固くよう天の冥衛
冥加おうるやハ予ゞ徳来の仏業ふ思いろ〳〵ふれを
成ふ盛うべきうのう大抵今の世ふ在くも。及ぶ空身
もろく名誉を天下に伝うるくもまぐをあてう乃
仕合と思ふべう〳〵皆幼おのの時よりん中に大教を
立ったう。然を九天授を漏をるを思む故ふ喜
うふくうハ徐らぐるく。予ゞ今の身ふ及びーも。右
の如く私んをうくん身の行いを勢たる故ふ
らんと思ふでかりなう。況くやも天機を漏とる
を以。良ふ一つの止むるのう志有うそれ

を八五穀の干陽小穀粒あるへ。其の交を呼ふ蘇
ら原野のうふ其の類そを集ぶる類衆余なく。
今支天下の士人ら皆我ゞ同類うう此の如き神道
を冥ていうでう我ゞ同類うう此の如き神道
以学聖君の教化の益きぐ。予ふ立身せ〳〵姓名を
のべて父母ふ孝行を先とをべきうを論
お年ろふ告知〳〵むる者うく〳〵。
私ふ曰此決科要語の作者楊貞復先生ら此
縁未の年号。予ふ潘雪松ら馮開之ゞ時ふ五
身せ〳〵談きうて考ま八ゞ先生とふ同時
代のんう。固くうて先生の此縁の如う

を幸として此書の門へ加くられたるや又此詩事を写及びて加くらるゝ事や知らぐべし。

東武地泉戴岳画
陰陽文繪鈔
全部二冊

このごろ人のもとへ施して天の陽報と遊ばせる書乃孫知ら甚多きものゆゑ此書を綴めて和字功過自知錄と名付全部一冊也

發行

江戸日本橋南壹丁目 須原屋茂兵衛
同 淺草茅町二丁目 同 伊八
同 日本橋通二丁目 山城屋佐兵衛
同 芝神明前 岡田屋嘉七
同 兩國横山町三丁目 和泉屋金右衛門
同 芝神明前 内野屋彌平治
同 日本橋通二丁目 須原屋新兵衛
同 室町二丁目 大阪屋藤助
京都三條通御幸町角 吉野屋仁兵衛
同 寺町通大和大路東へ入 永樂屋東四郎
大阪心齋橋安土町 河内屋和助板

書肆